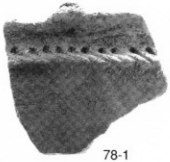
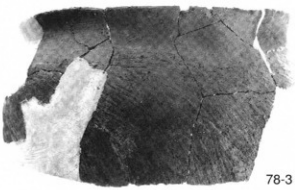
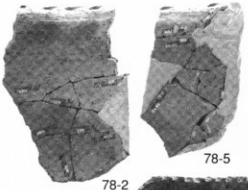

78-1


78-3


78-2

78-5

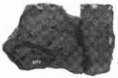
78-4

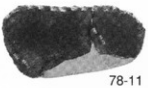
78-6

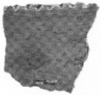
78-7

78-8

78-9


78-12

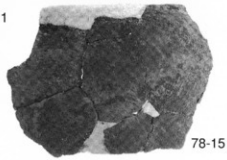

78-11


78-10

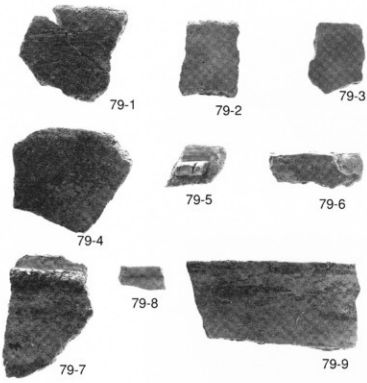
78-13

78-14

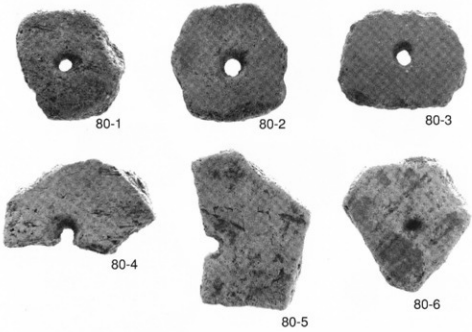
78-16


78-15

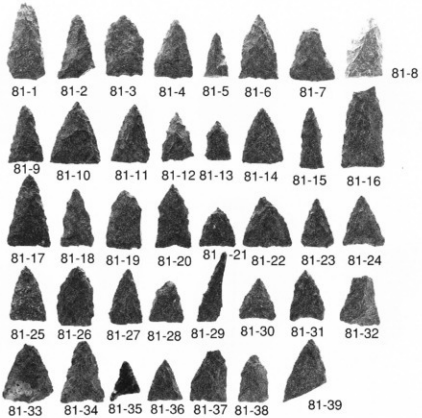
１区東側遺物包含層出土縄文土器（深鉢）



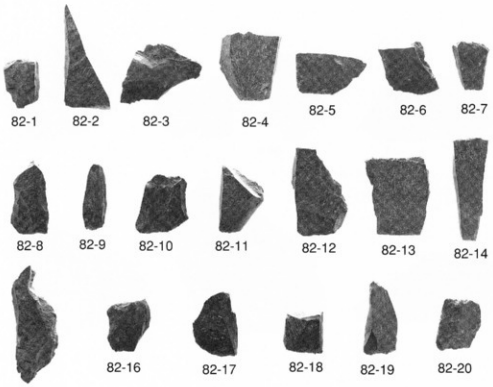
１区東側遺物包含層出土縄文土器（深鉢、浅鉢）



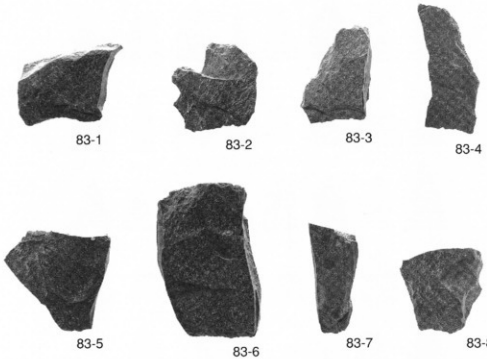
１区西側遺物包含層出土縄文土器（有孔円板）



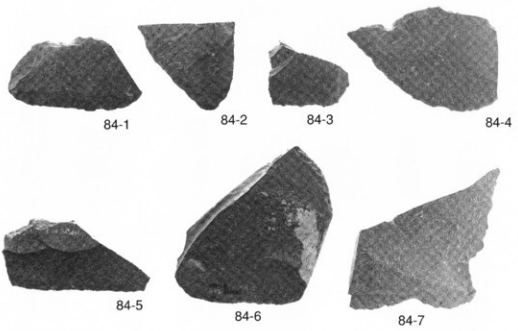
１区西側遺物包含層出土石器（石鏃）



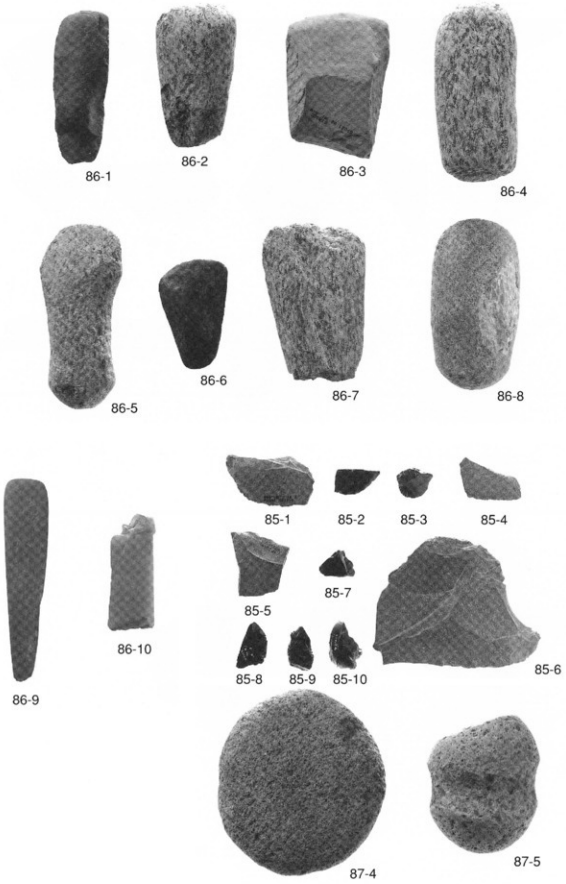
１区西側遺物包含層出土石器（契形石器）



１区西側遺物包含層出土石器（契形石器）

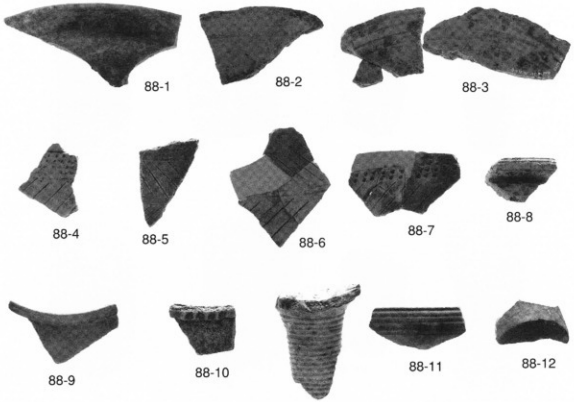


１区西側遺物包含層出土石器（スクレイパー）

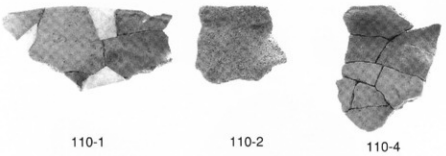


１区西側遺物包含層出土石器（石斧、垂飾、石棒類、敲石、磨石、石錘）

原田遺跡1区図版40

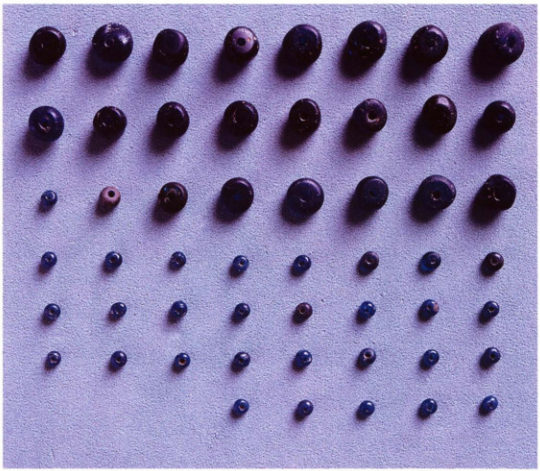


1区出土弥生土器



1区西側出土土師土器（甕）

勾玉・
切子玉



ガラス玉

原田古墳　玉類

佩表側　　佩裏側

柄頭

同上　X線写真

原田古墳　双龍環頭大刀

佩表側

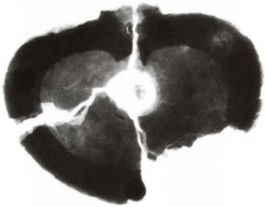
佩裏側

原田古墳　双龍環頭大刀

94-1　表面

94-1　裏面

轡（鏡板）



94-1

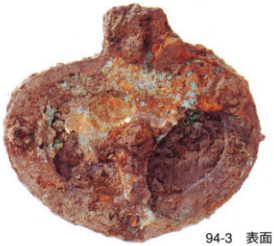
94-2

X線写真

94-2　表面

94-2　裏面

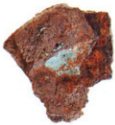
杏葉



94-3　表面

94-3　裏面

杏葉



94-4　表面

94-4　裏面

杏葉

95-1　表面

95-1　裏面

95-2　表面

95-2　裏面

95-3　表面

95-3　裏面

95-4　表面

95-4　裏面

雲珠・辻金具

原田古墳　馬具

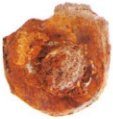
原田遺跡１区図版46

95-5　表面

95-5　裏面

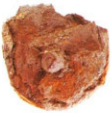
95-6

96-2


96-1　表面

95-1　裏面

96-3　表面

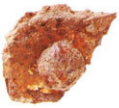

95-3　裏面

96-4

96-5

96-6　表面

95-6　裏面


96-7

96-8

96-9

96-10

96-11

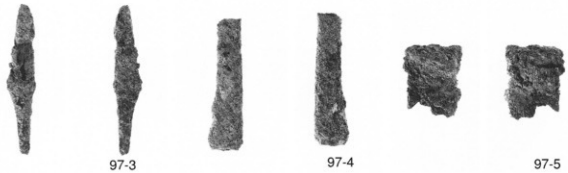
96-14

97-1

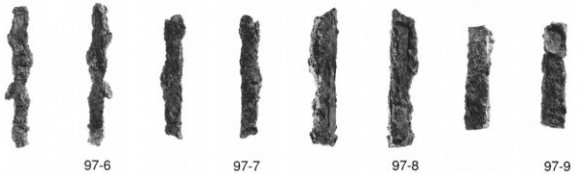
97-2

原田古墳　馬具・耳環

92-鐔　94-7　96-12　96-13



97-3　97-4　97-5



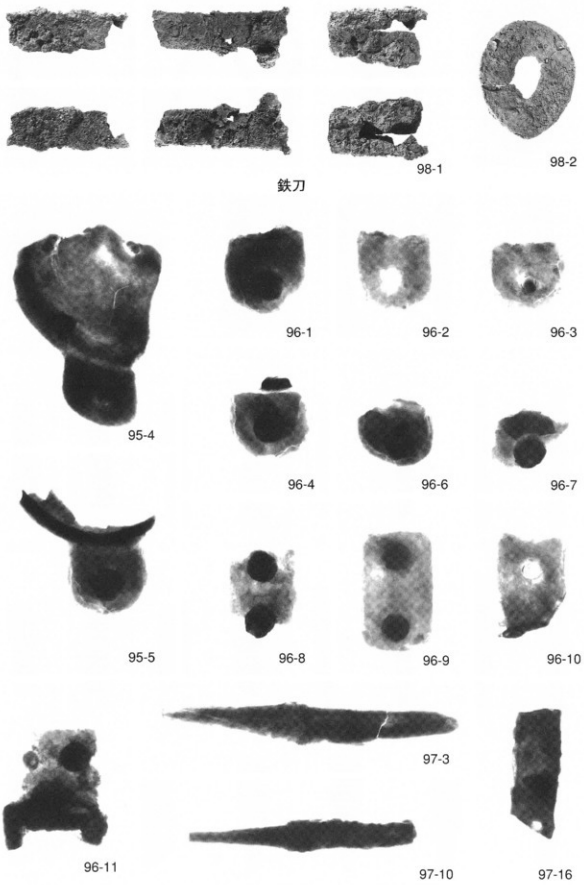
97-6　97-7　97-8　97-9

97-10　97-11　97-12　97-13

97-14　97-15　97-16　97-17

大刀鐔・轡引手壺・鉸具・刀子・鉄鎌・鉄鏃・その他

原田古墳　金属製品



原田古墳　鉄刀・金属製品 X 線写真

100-1

100-6

100-2

100-7

100-4

100-8

100-5

100-9

1 区原田古墳出土須恵器（蓋坏）

100-10

100-14

100-12

100-15

100-13

100-16

1区原田古墳出土須恵器（蓋坏）

101-5

101-6

101-7

１区原田古墳出土須恵器（高坏）

101-9

101-10

101-11

1 区原田古墳出土須恵器（高坏）

101-12

101-13

101-14

１区原田古墳出土須恵器（高坏）

101-15

101-16

101-17

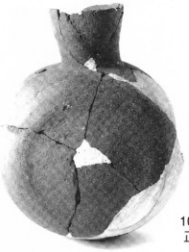
１区原田古墳出土須恵器（醳・壺）

102-1

102-2

102-3

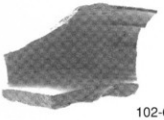
１区原田古墳出土須恵器（壺）



102-4
正面

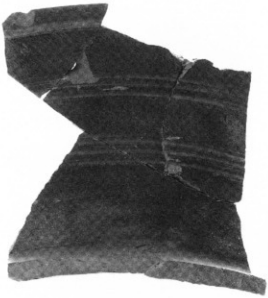
102-4
側面

102-5



102-6

1 区原田古墳出土須恵器（提瓶、甕）

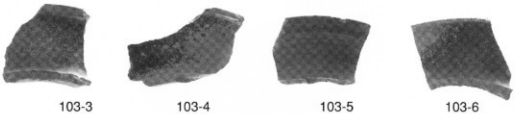


103-1

103-2

１区原田古墳出土須恵器（甕）

原田遺跡 1 区図版58



103-3　103-4　103-5　103-6

103-7　103-8　103-9

103-10

103-11

1 区原田古墳付近出土須恵器

108-1

108-7

108-3

108-8

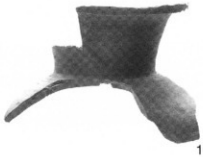
108-4

108-11

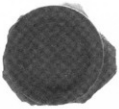
108-6

108-12

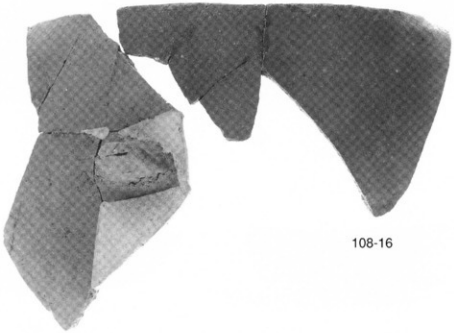
１区西側斐伊川河床跡２出土須恵器



108-13

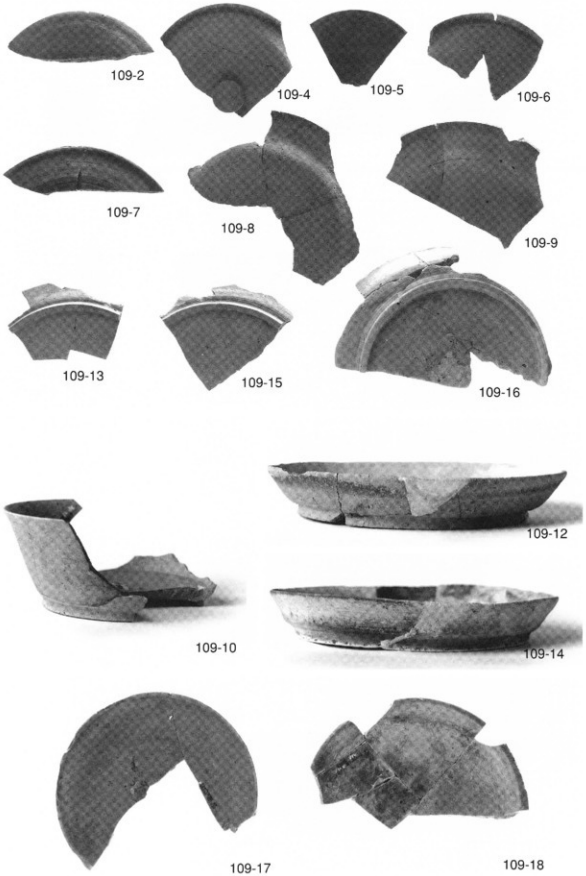


108-15



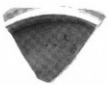
108-16

１区西側斐伊川河床跡２出土須恵器



１区西側斐伊川河床跡２出土須恵器

原田遺跡１区図版62



111-1

111-2

111-3

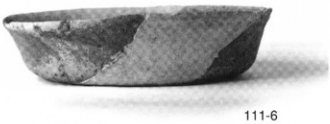
111-4

111-7

111-8

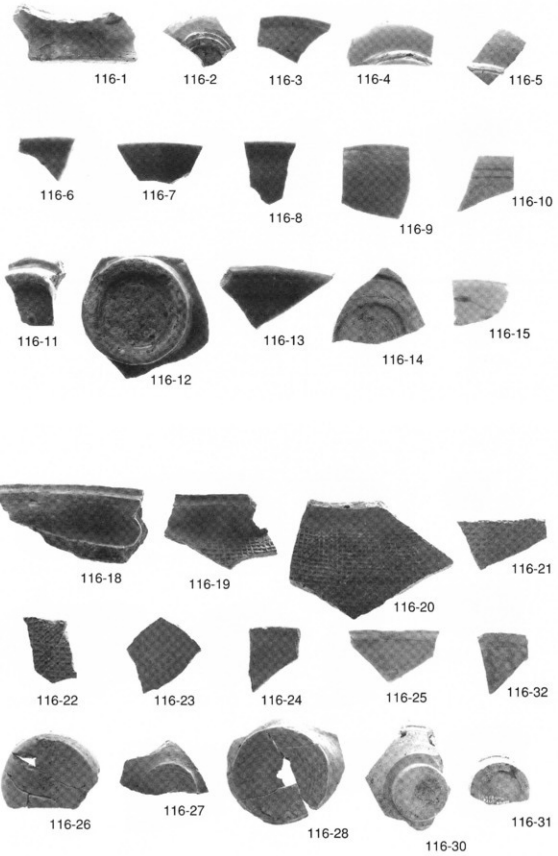
111-9

111-5



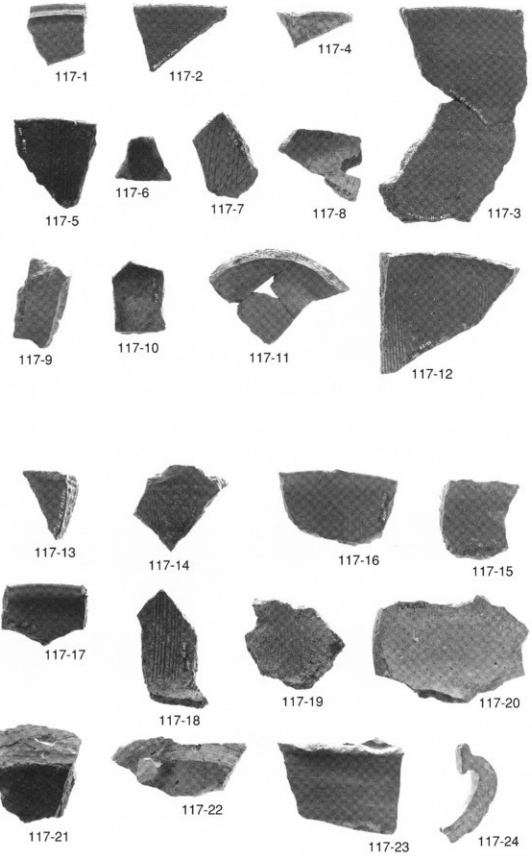
111-6

１区西側斐伊川河床跡２出土土師器、製塩土器、土錘



１区出土陶磁器・須恵器・土師器

原田遺跡 1 区図版64

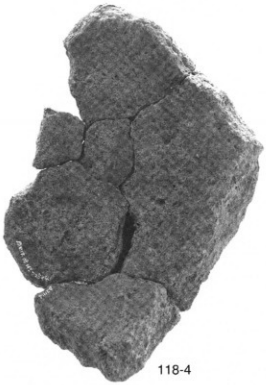


1 区出土陶磁器

118-2

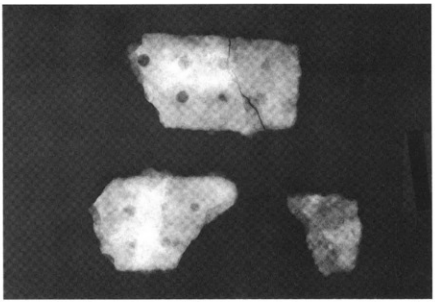
118-3

118-1



118-4

118-6



118-5
（X線写真）

１区出土石器（硯・砥石・鉢）・金属製品（銭・小札）

第５章　前田遺跡（４区）

第１節　４区の調査経緯と遺跡の概要

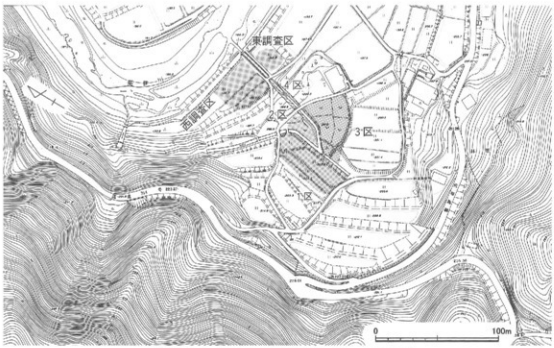
調査の経緯　前田遺跡は仁多郡仁多町大字三沢の林原集落に所在し、原田遺跡の対岸にあたる。斐伊川の左岸の河岸段丘上とその周辺が遺跡の範囲であり、かつては、遺跡の中心部に民家と墓地などが存在し、周辺部は畑地と水田になっていた。

遺跡が発見されたのは、平成５年３月の分布調査時であり、集落跡が存在する可能性があると判断された。これを受けて、島根県埋蔵文化財調査センターが平成12年に範囲確認調査を行い、段丘上と斐伊川沿いの２カ所で、土器が出土した7,800㎡の範囲を本調査の対象とした。調査の円滑化を図るため、調査区を１～４区に分け、１～３区を平成14年４月15日から12月２日まで、４区を同年８月28日から12月18日まで実施した。なお、調査着手前の４月13日にリモコン撮影を、調査完了の12月18日に航空写真撮影を行った。

なお、調査は１～３区と４区を同時に進行させたため、２班体制で実施した。よって、報告書もそれぞれに作成している。本書には４区の発掘調査の成果が掲載されている。

１～３区については、平成16年度刊行の『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』５に掲載予定である。

遺跡の概要　遺跡は舌状の台地上とその周辺に所在するので、第121図のように調査区を４区分し、１区から４区と呼ぶ。最高所１区の標高は204ｍで、斐伊川沿いの４区は190ｍあり、高低差は14ｍとなる。中央の舌状の台地は宅地跡と畑地で、周辺部は水田であった。台地の東側の水田は大きな区画となっているが、これは1950年代の鉄穴流しによる水田造成の盛土によるものである。それ以前は、細長い水田が多く、棚田状を呈していた。



第121図　前田遺跡位置図（１／3,000）

遺跡の概要は遺跡の範囲が広いため、区別に記述する。なお、4区は第2節以降で詳しく述べる。

【1区】河道と考えられる谷状の落ち込みを検出している。長さ25m、幅9m、深さ1mの規模である。この落ち込みからは、縄文時代後期から古代の土器が多く出土している。特に、多いのが縄文時代後期前葉の土器である。なお、この落ち込みは3区に伸びている。

【2区】1区と3区に挟まれた調査区で、中国電力の発電用水路に囲まれている。事前のトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

【3区】縄文時代以前の洪積世の斐伊川河道を確認した。この河道の堆積層（河岸段丘）からは三瓶山の旧石器時代の活動で噴出された火山灰層を検出している。（第9章第1節参照）また、1区から伸びる谷状の落ち込みの西端では、縄文時代後期前半の埋設土器と晩期から弥生時代前期の土坑1基が発見された。また、北端では2間四方の掘立柱建物跡を1棟を検出している。時期は不明である。

第2節　東調査区の遺構・遺物

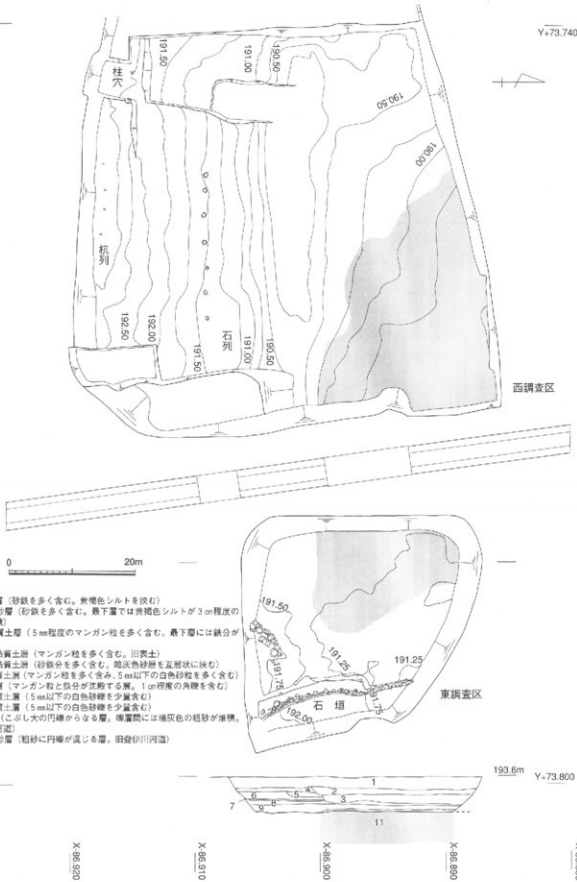
東調査区は中国電力㈱の発電用水路の東側に位置する。標高は193mで、南には1～3区がのる台地が迫り、北には斐伊川が流れている。斐伊川との比高差は5mを測る。東側には標高は196mの広い水田があり、隣接水田の比高差は3.5mを測る。これは1950年代後半の鉄穴流しに伴う廃土で、水田が造成されたためである。鉄穴流し以前は西調査区の南斜面と同じ樹田であったという。東調査区においても、この時に1m程、山砂が堆積し、西調査区と1mの高低差が生じている。

遺構・遺物（第122図、前田遺跡図版3上段・4）

調査区の西壁の層序は、鉄穴流しで堆積した粗砂層の下に、昭和初めの水田がある。さらにその下にも、もう一枚水田の土層が存在する。また、5の砂質土も水田土壌と推定され、新しい水田造成で残った土層である。新旧の水田の切り合いも認められる。時期は明確にはできないが、近世以降のものと推定される。9の粘質土層下に河川の堆積層である砂礫層が存在する。この層は北西部に存在し、水路を挟んで、西調査区にも伸びており、古い時代の斐伊川の流路跡と推定される。しかし、河床面に原田遺跡でみたような人頭大以上の大きさの河原石を伴わないので、流心部ではなく、少し離れた流路跡と考えられる。11層の粗砂層は河床にできる堆積層である。なお、河床の標高は191m前後であり、斐伊川の対岸にある原田遺跡の奈良時代の川底（河床跡2）より1m以上高い。

遺構としては、調査区の東側で検出した石垣と南壁付近にある河石を無造作に積んだ石段状遺構であった。石垣は高さ60cmのもので、調査区を南北に横たわっている。昭和30年代までの古い水田に伴うもので、裏込め石を供わない簡単なものである。後者は河床面近くから積まれており、水田造成以前のものと推定される。

遺物としては水田土壌から土師器や近世の陶磁器が少量出土している。南の丘陵裾部からの出土であり、台地部からの混入と推定される。なお、河川の堆積層からは発見されなかった。



1 灰色礫砂層（砂鉄を多く含む。黄褐色シルトを挟む）
2 暗灰色礫砂層（砂鉄を多く含む。最下層では黄褐色シルトが3cm程度の厚さで堆積）
3 明褐色粘質土層（5mm程度のマンガン粒を多く含む。最下層には鉄分が沈着する）
4 暗赤褐色粘質土層（マンガン粒を多く含む。旧表土）
5 明灰褐色粘質土層（砂鉄分を多く含む。暗灰色砂層を互層状に挟む）
6 赤褐色粘質土層（マンガン粒を多く含み、5mm以下の白色砂粒を多く含む）
7 橙褐色粘層（マンガン粒と鉄分が沈着する層。1cm程度の角礫を含む）
8 黒褐色粘質土層（5mm以下の白色砂礫を少量含む）
9 暗褐色粘質土層（5mm以下の白色砂礫を少量含む）
10 褐色礫層（こぶし大の円礫からなる層。礫層間には暗灰色の粗砂が堆積。旧波伊川河道）
11 明褐色粗砂層（粗砂に円礫が混じる層。旧袋伊川河道）

第122図　前田遺跡4区遺構測量図（1／300、アミは砂礫層）

第３節　西調査区の遺構・遺物

西調査区は中国電力㈱の発電用水路の東調査区の反対側に位置する。標高は192ｍで、南には１～３区がのる台地が迫り、北には斐伊川が流れている。斐伊川との比高差は４ｍを測る。南側の斜面には細長い水田が３段程あり、その上に、前田２区が存在する。その比高差10ｍである。

遺構・遺物（第123図～第125図、前田遺跡図版３・５・６）

調査対象地は斐伊川沿いにある３枚の細長い水田である。調査区の東壁の層序は、第123図のとおりである。水田土壌下に、１ｍ以上の暗褐色・黒褐色粘質土層が厚く堆積し、その下層に東調査区で検出された河川の堆積層である砂礫層が存在する。この砂礫層は周囲より少し高くなった自然堤防となっている。この河床の南側の丘陵との間には、東西に細長い後背湿地が存在する。ここには南の斜面から流れた土砂と共に、丘陵上からの弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器が混入している。14層は灰褐色粘土層であるが、その層に一時期に有機物を含む黒褐色土層や灰褐色粘土層が入る。土師器などの遺物はその層前後に多く存在する。なお、後背湿地部分は土層が軟弱であり、地山まで掘り下げることができなかった。古代から中世にかけては、湿地部分が幅２ｍほど溝状に残っていたと推定される。その部分も洪水により、８・９の砂層が覆うこととなる。

遺構　南側斜面において６個の川石からなる礎石列と柱穴２個を検出した。

礎石列（第124図、前田遺跡図版５上段）

礎石は調査区の南側斜面の標高は191.5ｍに、東西にほぼ水平に並ぶ。川石は35㎝から40㎝程の大きさで、厚さは８㎝から10㎝程の扁平な石である。石の間隔は平均で２ｍ４㎝前後となり、１間が６尺７寸となる。この礎石列を建物に伴うものとすると、北側に造成を大規模に行うこととなる。逆に、南側に平行する桁行列があるとすると、相当に地山がカットされていなければならない。共に、そのことを示すものは現状では確認されておらず、建物に伴うものではない。可能性としては塀のような構造物に関わる礎石かもしれない。時期は水田造成以前となるが、明確にはし得ない。

柱穴（第124図、前田遺跡図版６上段）

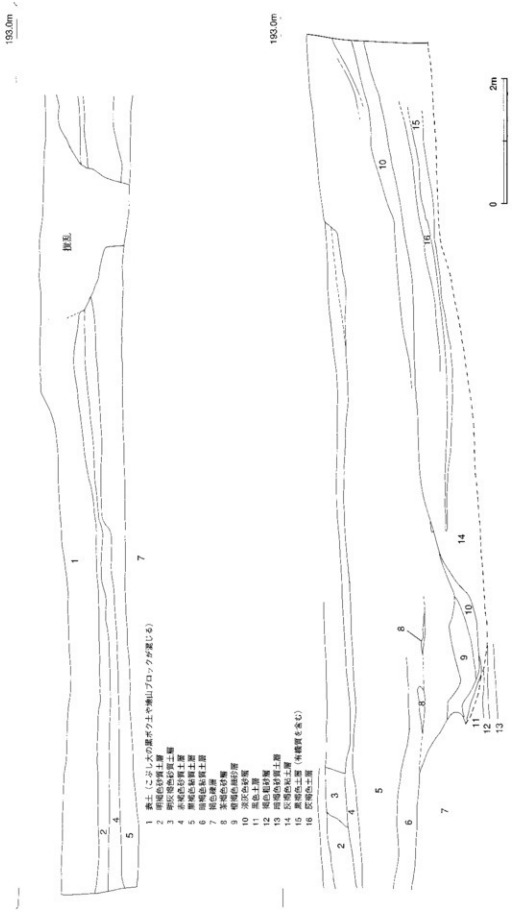
柱穴は調査区の南側斜面の標高は192.7ｍに、東西で２個確認した。周囲は２ｍから３ｍ幅の平坦面が造られている。前記の礎石列とは20°程南にズレている。東側の柱穴は径40㎝、深さ45㎝である。中に、幅15㎝の長方体に加工した柱痕が残っていた。西側の柱穴は径20㎝、深さ28㎝である。こちらも中に、幅13㎝の長方体に加工した柱痕が残っていた。両者とも脆弱であり、持ち帰ることはできなかった。柱痕の間隔は２ｍ20㎝となり、７尺２寸５分となる。性格については、建物の柱穴かどうかは２個のみであり、決めがたい。なお、南側は２～３ｍで崖であり、北も低い斜面となる。時期については、水田造成以前となるが、明確にはし得なかった。

なお、南端の193ｍ付近で東西に４個並ぶ小さい杭列を確認した。しかし、耕作土に近く、杭の残り具合より水田に関わるものと推定される。

遺物　西調査区の遺物包含層からは弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、青磁、白磁、粉青沙器、備前、瀬戸、羽口、釘、槍先、鉄滓がある。出土状況は第122図のとおりで、南側の斜面から多くが出土している。上の１区、２区から落ちてきたものと推定される。

西調査区遺物包含層出土遺物①（第126図、前田遺跡図版７上段）

第126図は弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器である。１、２は弥生土器である。１は高坏の脚部で、「ハ」の字状に開く。外面には沈線が幾条も引かれ、下方に凹線が３条入る。また、沈線

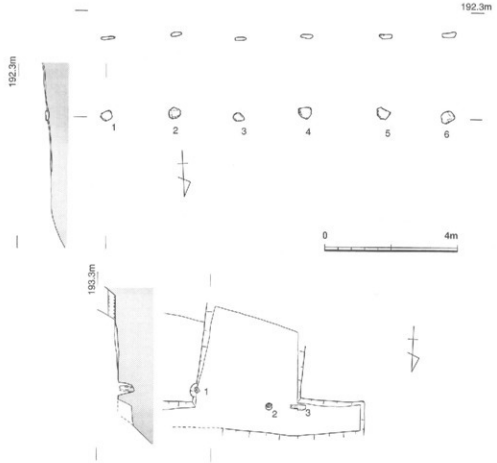


第123図　前田遺跡４区西調査区東壁実測図（１／60）

と凹線の間に竹管文も巡る。中期の第Ⅳ様式1にあたる。2は壺で、口縁部が大きく外に開き、口縁端部は平坦面で、ヘラで格子文を描き、円形の浮文が付く。頸部外面には2条以上の凹線が入り、中期の第Ⅲ様式1にあたる。3～5は古墳時代の土師器である。3は高台が付く壺で、前期のものか。4は高坏の坏部で、体部と底部に稜を持つ。中期と考えられる。5は盤で、後期のものである。同じ形態の盤は家ノ脇Ⅱ遺跡の2区木列付近から出土している。6～8は古墳時代後期の須恵器である。6は須恵器の蓋坏の身で、出雲5期にあたる。7は広口壺の口縁部である。8は輪状のつまみを持つ蓋で、後期末にあたる。9は奈良時代の土師器坏。体部は短く、外に開く。10、11は古墳時代後期からから奈良時代の甕である。12は製塩土器で、内外面に指頭圧痕が残る。

西調査区遺物包含層出土遺物②（第127図、前田遺跡図版7下段）

第127図は中世の遺物である。1～3は青磁で、4は白磁で中国産で、5は朝鮮王朝産の陶磁器である。1は青磁の蓋と推定される。2は碗で、口縁部外面に雷文と蓮弁を持つ。3は碗で、見込みに草花文のスタンプがある。4は碗で、口禿となっている。5は粉青沙器の碗で、象眼文様が施されている。6は中世土師器の皿で、糸切り底である。7～9は国産陶器である。7、8は備前の擂鉢である。7は口縁端部が僅かに肥厚する。15世紀。8は底部の破片である。9は瀬戸の小形の香炉である。灰釉がかかり、底部は糸切りで、瘤状の脚が付く。10は中世須恵器の甕の口縁部で、肩部には格子状の叩きが付く。11も同じく須恵器甕の体部の破片で、表面には格子の叩きがある。12は鵜の羽口の破片である。先端は高熱で、ガラス質となっている。13、14は鉄製品である。13は大形の釘で、長さ17.4cmの大形品である。14は槍先で、長さ22cm、茎は短い。



第124図　前田遺跡4区（西調査区）石列（上段）・柱穴（下段）実測図（1／120）

鉄滓（図版８）

河床部分と南側斜面から鉄滓が12個出土している。総て、碗形滓であり、図版８は中型の碗形滓である。含鉄。他に小形の碗形滓がある。中世の碗形滓の可能性があり、精錬鍛冶の後半から鍛錬までまたがっている（注）。４個は、鉄分が認められない。鞴の羽口と共に、前田遺跡１・２区に、鍛冶遺構が存在したことを示す資料である。

（注）穴沢義功氏の教示による。

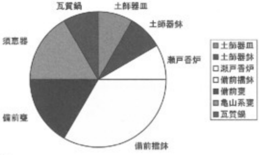
表14　前田遺跡４区出土陶磁器一覧

№	遺跡名	所在市町村	遺跡の性格	青磁碗												青磁皿坏				
				蓮B0	蓮B1	蓮B2	蓮B3	蓮B4	雷C2	雷C3	龍D	粗E	景	龍泉I	不明その他	皿F	稜花A	稜花B	景	不明その他
	前田遺跡（４区）	仁多町	散布地						3		4				蓮弁花文 1 不明その他 8					
			点数	16												0				
									42%									0%		

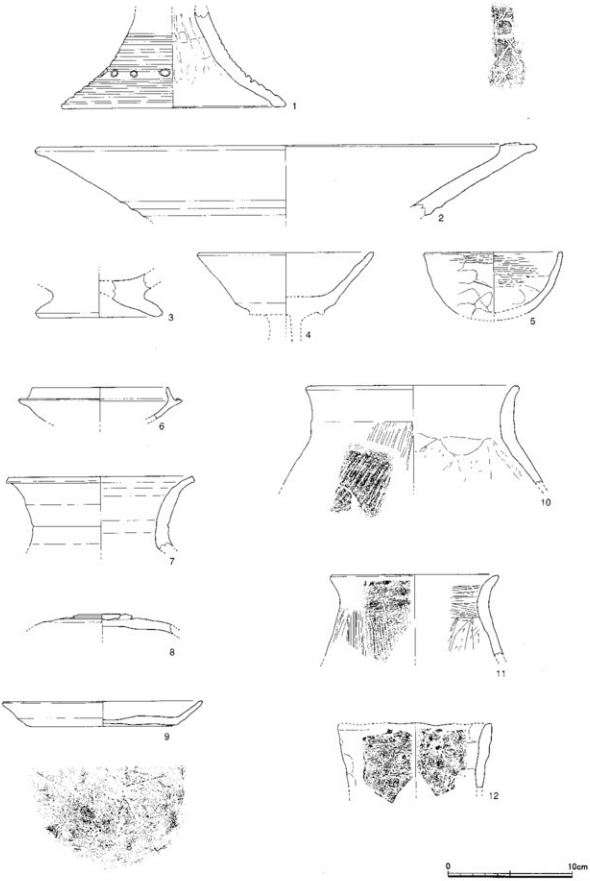
白磁碗皿							青花碗						青花皿					
A	B	C	D	E1	E2	不明その他	B	C	D	E	華南	不明その他	B	C	D	E	華南	不明その他
2																		
2							0						0					
		5%													0%			

天目	褐釉	その他の中国製品	朝鮮王朝			東南アジア	国産品	その他
			碗皿	瓶	不明			
1	1	青磁盤 1	2				土師器皿 1 土師器鉢 1 瀬戸香炉 1 備前擂鉢 4 備前甕 2 須恵器 2 瓦質鍋 1	江戸17C～18C 唐津盃 1 唐津碗 1 伊万里小坏（酒坏） 1
1	1	1	2	0	0	0	12	3
3%	3%	3%					32%	8%

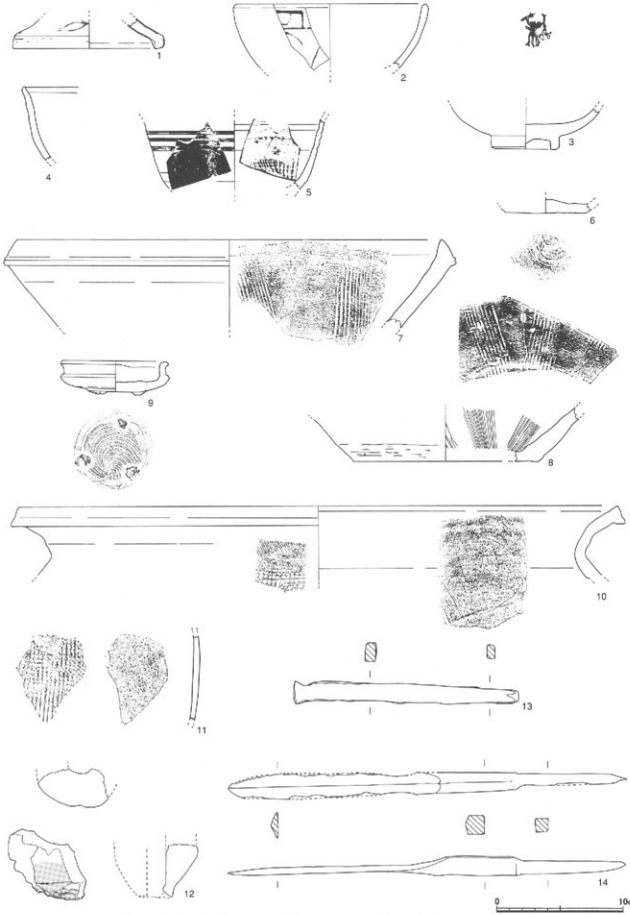
計 38点



第125図　前田遺跡４区西調査区遺物出土位置図



第126図　前田遺跡４区西調査区出土遺物実測図（１／３）



第127図　前田遺跡４区西調査区出土遺物実測図（１／３）
（アミは羽口先端のガラス質部分）

第4節　小　　　結

4区においては古代の流路跡を確認した。砂礫層からなり、斐伊川流心部ではないものの、近世の水田造成までは河床の一部であったことを物語っている。

遺構としては、礎石列と柱穴を検出した。しかし、前節で説明したように斜面に立地しており、部分的にしか残っていなかった。水田造成以前のものであるが、遺物も伴ず、時期は分からなかった。但し、包含層から出土する中世の遺物は室町時代に集中しており、その頃のものの可能性もある。

遺物は南側の斜面とその下方にある後背湿地の堆積層から出土している。斜面上の前田遺跡1・2区に所在したものが、二次的に流れ込んだと推定される。台地状になっている1・2区は、古代の集落跡であった可能性が強い。また、陶磁器などの中世に属する遺物も斜面から出土している。古代と同じく、室町時代の14世紀から15世紀初めにも、1・2区は生活空間に使用されたと考えられる。斐伊川流域の遺跡に比べ、貿易陶磁の量が多く、瀬戸の香炉もあり、一般の集落とは考えられない。林原集落にも中国陶磁をもつ遺跡が存在することがことが判明した（注）。

大字三沢の中に含まれる林原は狭隘な斐伊川の谷間であるが、前田遺跡周辺は拓け、耕地も一番多い。立地上も台地状となっており、中世の屋敷地には適している。

（注）三沢城の城主であった三沢氏の系図の中で、3代当主の傍系に「林原主」為光、為経が出てくる。三沢氏の傘下で、林原に根付いた勢力がいたことが知れる。

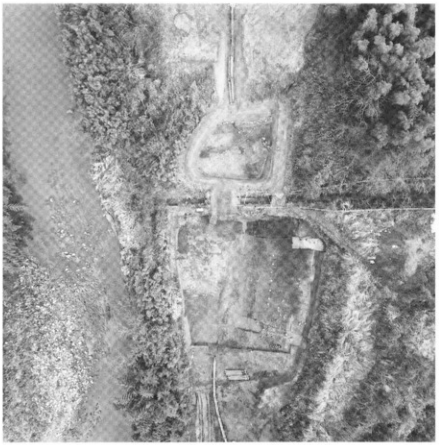
高橋一郎「奥出雲の新補地頭三沢氏（上）」『山陰史談』14　山陰歴史研究会　1997

表15　前田遺跡4区出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	写真図版	地区	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	内面の調整	外面の調整	形態・文様の特徴	備考
126	1	前7	4区	C-1	弥生土器	高坏	-	-	18.0	全面：灰褐色	ミガキ	ヨコナデ・指頭圧痕・絞り		
126	2	前7	4区	A-1	弥生土器	壺	40.0	-	-	全面：浅黄橙色	風化のため不明	ミガキ		
126	3	前7	4区	C-0	土師器	脚付壺	-	-	10.2	全面：にぶい橙色	ヨコナデ	ナデ、ミガキ		
126	4	前7	4区	C-2	土師器	高坏	14.0	-	-	全面：にぶい黄橙色	ナデ	ヨコナデ	赤褐色上を化粧土として表面に塗る。	
126	5	前7	4区	A-1	土師器	埦	11.1	(5.4)	-	全面：にぶい橙色	ヨコナデ、ヘラナデ	ハケ、ナデ		
126	6	前7	4区	排土中	須恵器	蓋坏	10.8	-	-	全面：青灰色	回転ナデ	回転ナデ		
126	7	前7	4区	C-0	須恵器	壺	14.6	-	-	全面：黒褐色	回転ナデ	回転ナデ		
126	8	前7	4区	A-1	須恵器	蓋	-	-	4.8	全面：暗青灰色	ヘラケズリ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ		
126	9		4区	4区ベルト内	土師器	皿	16.0	2.0	-	全面：にぶい黄橙色	回転ナデ、指頭圧痕、ナデ	ナデ		表面赤褐色塗布
126	10	前7	4区	B-1	土師器	甕	17.0	-	-	全面：浅黄橙色	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ヘラケズリ		
126	11	前7	4区	A-1	土師器	甕	13.4	-	-	全面：にぶい橙色	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ・ヘラケズリ		
126	12	前7	4区	C-2	土師器	製塩土器	12.2	-	-	全面：明赤褐色	指頭圧痕、ナデか	指頭圧痕，ヨコナデ		
127	1	前7	4区	B-0	青磁	蓋(壺もの)	11.8	-	-	全面：オリーブ灰色(青磁釉)	草文、沈線	釉をはぐ		
127	2	前7	4区	B-1	青磁	碗	-	-	-	外：緑灰色 内：明灰青色			雷文と蓮弁文	小片。口縁部二次的に強く火を受けている。
127	3	前7	4区	A-1	青磁	碗	-	-	5.4	全面：黄灰色（釉はオリーブ灰）	回転ナデ、ヘラケズリ	不明	見込みに草花文	使用時の削痕が残る。
127	4	前7	4区	A-1	白磁	碗	-	-	-	全面：灰白色（釉は明オリーブ灰）	ケズリ	ヨコナデ		
127	5	前7	4区	T-2	陶器	紛青沙器碗	-	-	-	全面：灰白色			沈線二条。象眼で縄簾文、列点文を白土で埋める。	
127	6	前7	4区	A-2	土師質土器	皿	-	-	6.2	全面：淡橙褐色	ナデ、ヘラ切り	回転ナデ		
127	7		4区	A-0	陶器備前	擂鉢	35.7	-	-	全面：橙～灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	10条の擂目	内部は使用されて磨耗している。
127	8	前7	4区	A-0	陶器備前	擂鉢	-	-	14.8	全面：暗赤褐色	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	9条の擂目	内部擂目は使用されて磨耗している
127	9	前8	4区	A-1	陶器瀬戸	皿	8.5	3.7	-	全面：灰白色（釉は黒釉）	回転ナデ、回転糸切り	回転ナデ、螺旋状うずまきナデ		粘土塊三個付けて高台とする。
127	10	前7	4区	A-1	須恵器	甕	47.4	-	-	全面：青灰色	ヨコナデ、ハケ目、タタキ	ハケ目、ヨコナデ		
127	11	前7	4区	A-1	須恵器	甕	-	-	-	全面：青灰色	タタキ	ハケ目、ナデ		

前田遺跡写真図版

4区と斐伊川（航空写真・南西から）



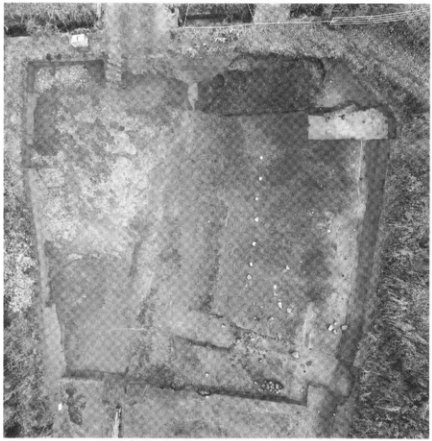
4区全景（航空写真・左は斐伊川）

前田遺跡図版 2

前田遺跡と原田遺跡（航空写真・北から）

4区全景（航空写真・北東から）

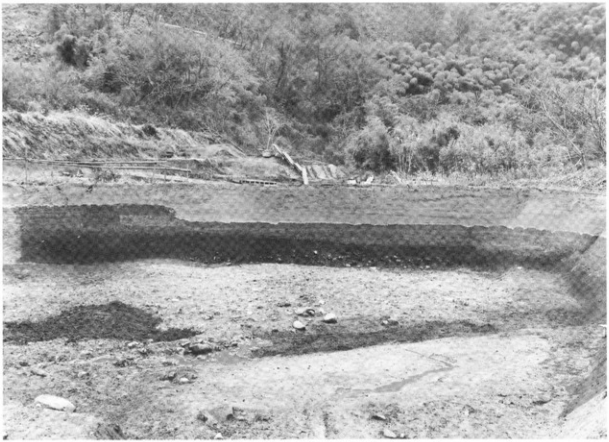
4区（東調査区）調査後全景（航空写真）



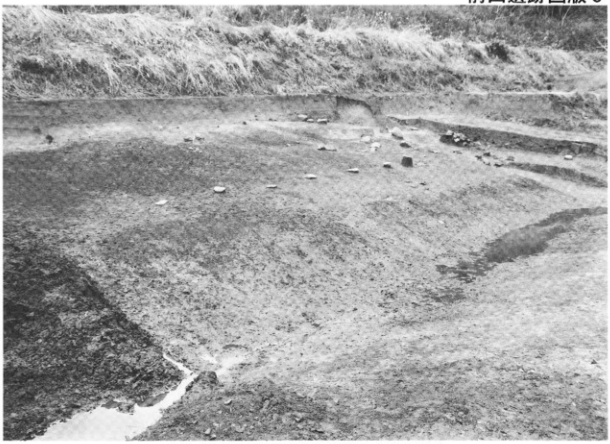
4区（西調査区）調査後全景（航空写真）

前田遺跡図版 4

4区（東調査区）全景（東から）



4区（東調査区）河床跡完掘状況（東から）

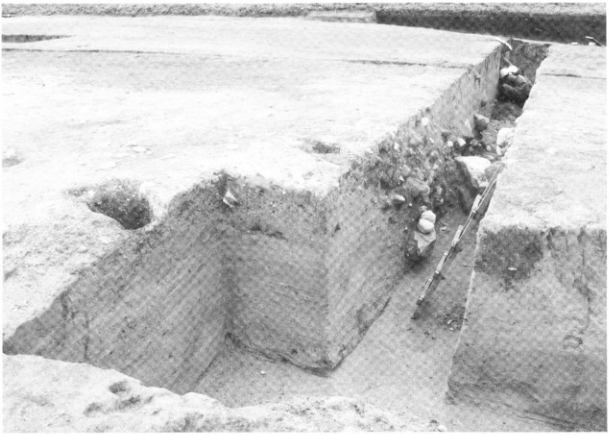


４区（西調査区）斜面完掘状況（北東から）

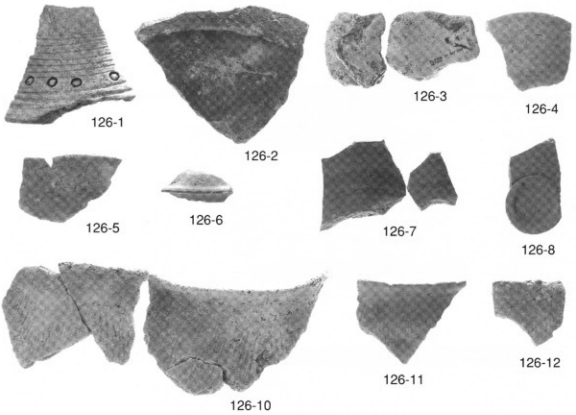
４区（東調査区）河床跡完掘状況（西から）

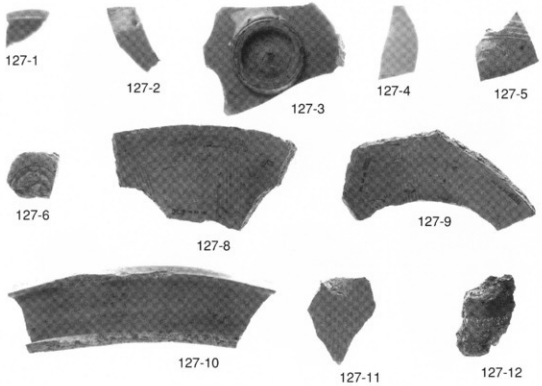
前田遺跡図版6

4区（西調査区）柱痕検出状況（西から）



3区トレンチ近景（火山灰検出状況・北壁）





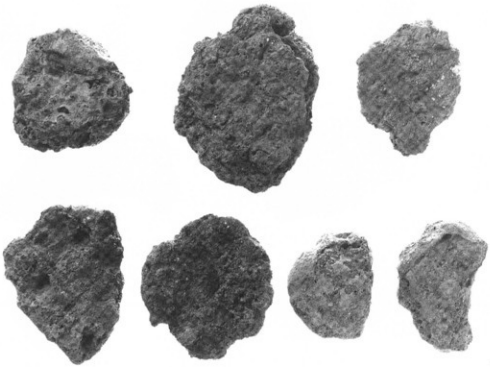
4区遺物包含層出土弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器

127-9

127-13

127-14

4区遺物包含層出土陶磁器・鉄製品



4区遺物包含層出土鉄滓（椀形滓）

第6章　原田遺跡出土の縄文土器について

山陰地方・縄文時代晩期前半の土器編年（予察）

柳浦　俊一

飯石郡頓原町板屋Ⅱ遺跡の発掘以来、島根県では晩期・突帯文土器期以前の土器の出土が増加している。これは、当地の晩期前半の土器編年が整備される段階に到達しつつあることを予見させる。原田遺跡では、近畿地方で「篠原式」とされる土器群がまとまって出土した。これは従来、「晩期前半」と一括された土器群の中からその後半期の土器群が抽出できる資料として重要である。

1．原田遺跡出土縄文土器の分類

原田遺跡から出土した縄文土器は以下のように分類できる。

Ⅰ群・・・後期

崎ケ鼻式（第78図1）

沖丈式の注口？土器（第60図1）

Ⅱ群・・・晩期（突帯文以前）

1類・・・滋賀里Ⅲａ式以前に位置づけられる土器群

深鉢ａ・・・口縁上端に屈曲の名残がみられるもの（第60図3・6・7）

ｂ・・・滋賀里Ⅲａ式（第60図4）

浅鉢ａ・・・沈線文。椀形の器形か。滋賀里Ⅱ式？（第70図1）

ｂ・・・頸部・胴部が強く屈曲し、口縁部が幅広のもの（第70図4～8）

2類・・・滋賀里Ⅲａ式～篠原式に並行する在地の土器群

深鉢ａ・・・頸部が緩いが明瞭に屈曲し、口縁部が短く外反するもの（第60図5～10、第61図1～3）

孔列文土器の多くはこの器形（第66図1～5、第77図1、第78図2・5・6）

ｂ・・・頸部の屈曲が明瞭で、口縁部がやや長く外反するもの（第55図1、第56図2）

ｃ・・・口頸部が直立気味・または外反して長く伸び、胴部に明瞭な屈曲・稜をもつもの（第57図1・2、第61図4・5、第62図2～4など）

ｄ・・・口頸部の屈曲緩く長いもので、胴部に明瞭な屈曲・稜を持たないもの（第58図1～3、第62図1～7、第64図5、第77図2・3など）

ｅ・・・砲弾形の器形。孔列文もこの器形あり（第55図2、第64図6～8、第65図1～など）

深鉢口縁部の文様

①・・・内面刺突（孔列文とその疑似タイプ　第56図2、第66図1～9、第76図1～6、第78図4～6）

②・・・口唇端部内側および上面刺突（第64図4、第66図10～16、第78図10～16）

③・・・口唇端部刻み目（第63図3、第66図17～21）

深鉢口縁部突起・・・外面突起位置に刺突を加えた円形浮文を付すことが多い

①・・・4山一単位のもの　リボン状突起の変容か（第61図4、第66図23・25～26）

②・・・3山を一単位とするもの（第66図23）

③・・・2山一単位のもの　山形の突起の頂部に円点を加えることにより2山とする（第55図1、第66図28）

④・・・幅広の突起頂部に刺突・円点を加え、山を表現するもの（第66図30・31）

⑤・・・1山の突起の頂部附近に、刻み目を入れて山を表現するもの（第60図6、第67図4・5など）

⑥・・・1山の突起で素文（第67図1～3）

深鉢口頸部文様

①・・・無文

②・・・内面刺突（孔列文含む）

③・・・垂下隆帯（第68図1）

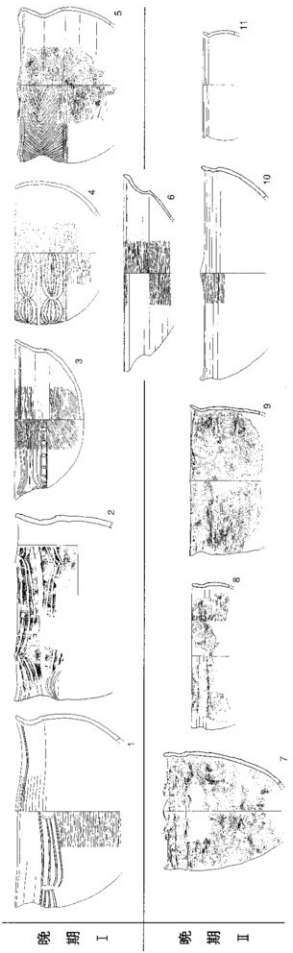
④・・・沈線文(垂下(第63図1)・縦横（第68図3）・双曲線状（第68図21）・山形多条（第68図22））

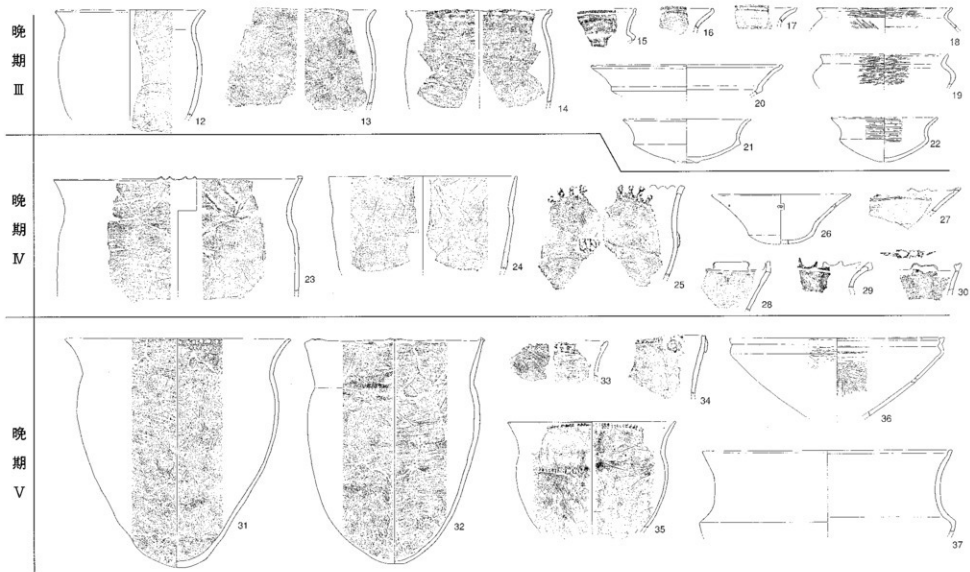
深鉢頸部文様

① 円形刺突（第68図15・16・18・19）

② 楕円形刺突（棒状工具で横方向からの刺突）（第68図14）

③ 爪形文に近いもの





第1図　晩期前半の編年（案）1／6　1、3～11板屋Ⅲ遺跡　2、目久美遺跡　33、35、36神原遺跡　他は原田遺跡

深鉢底部

① 平底

② 丸底に近い尖底

浅鉢a・・・頸部・胴部が強く屈曲する、長頸浅鉢

第1表 型式対照表

本稿案	近畿	中部瀬戸内
晩期Ⅰ	滋賀里Ⅱ	
晩期Ⅱ	滋賀里Ⅲa	
晩期Ⅲ	篠原（古）	舟津原（古）
晩期Ⅳ	篠原（中）	舟津原（新）
晩期Ⅴ	篠原（新）	谷尻

① 口縁部上端の屈曲が明瞭なもの（第70図4～5）

② 口縁部上端が屈曲するものの、不明瞭なもの（第70図6～15）

③ 口縁部内面に段がつくもの（第70図17、第71図1～16）

④ 口縁端部附近に沈線があるもの（第74図1～6）

⑤ 単純口縁（第74図7～17など）

浅鉢b・・・短頸で胴部の張りが強いもの

① 口縁上端が屈曲（第73図1）

② 単純口縁（第73図4～7など）

③ 口縁端部が肥厚（第73図8～10）

浅鉢c・・・短頸で、胴部の張りが弱いもの（第73図11・12）

浅鉢d・・・短頸。特異な器形（第73図13）

浅鉢e・・・椀形（第73図14～23など）

浅鉢f・・・皿形（第72図1～6）

Ⅲ群・・・晩期突帯文（第69図1～5、第79図5～7・9）

2．原田遺跡・Ⅱ群2類土器の位置づけ

原田遺跡から出土した晩期縄文土器のほとんどは、Ⅱ群2類とした土器群である。これらは刺突文（爪形文を含む）・刻み目文以外に、ほとんど文様を持たない。とくに浅鉢はほぼ完全に無文化している。近畿地方・晩期初頭に位置づけられる滋賀里Ⅱ式は、浅鉢に「橿原文様」と呼ばれる沈線文で飾られることが多く、深鉢にも沈線文が描かれるものが一定量含まれるようである。一方、次段階の滋賀里Ⅲa式（秋篠段階）では、大洞系の土器以外では無文化が進んでいる。ただし、滋賀里Ⅲa式では浅鉢の口縁上部が屈曲するものが多く混じるので、屈曲口縁の浅鉢がほとんど混じらない原田遺跡例はさらに新しく、篠原式の範疇に絞り込むことが可能である。

周辺の同時期の遺跡と比較すると、頓原町板屋Ⅲ遺跡旧河道出土土器（島根県教委1998）から原田遺跡Ⅱ群2類土器を差し引いたものが滋賀里Ⅲa式以前、同神原Ⅱ遺跡出土土器（島根県教委2003）が篠原式新段階（中部瀬戸内の谷尻（たんじり）式）に相当すると思われる。

3．Ⅱ群2類土器の変遷

1区西側土器溜りで出土したⅡ群2類の深鉢は、b（第1図31・32）・c（23・24）・d（25・33～35）のみでa（12～14）を含まないという特徴がある。同様な状況は島根県頓原町神原Ⅱ遺跡でも確認でき（島根県教委2003）、aとb・c・dとに時期差が想定できる。篠原式古段階やそれに並行するとされる中部瀬戸内の舟津原式古段階の深鉢は、a同様口縁部が短く強めに外反する器形で（家根祥多1994　平井勝1996）、aがb・c・dに先行すると考えられる。深鉢bの底部が丸底

であることも、bが後出的要素として捉えることができる。孔列文とされる内面刺突の土器群にはaと同様な器形があり（14）、孔列文の導入は篠原式古段階までさかのぼると思われる。胴部が明確に屈曲するか稜をもつ深鉢c（24）は、鳥取県目久美遺跡（2）などで滋賀里2式の文様を持つものがあり、この器形は滋賀里2式にはすでに登場していたようである。一方で神原Ⅱ遺跡では胴部が屈曲・稜をもつ深鉢cは顕著でなく、突帯文土器にも胴部が屈曲・稜を持つものはない。このことから、深鉢cはやや古い要素と考えられる。

なお、頸部・胴部に刺突文を加える土器は原田遺跡ではほとんど出土せず、神原Ⅱ遺跡では一定量含まれることから、刺突文は突帯文出現期直前から直後に盛行すると思われる。

深鉢をまとめると次のようになる。aが篠原式の前半代、b・dが後半代に位置づけることが可能である。cは土器溜りでb・dとともに出土しているので、篠原式新段階まで残る可能性はあるが、神原Ⅱ遺跡の状況を勘案すると突帯文出現期直前までは残らないかもしれない。篠原式古・中・新の3段階にこだわるとすれば、①深鉢a・c、②深鉢c・d、③深鉢b・d、の3段階の組み合わせが想定できるようにも思われるが、さらに検討が必要である。砲弾形のeは後期以降一般的な器形で、口縁部内面および口縁端部内側に刺突文を加えるものがやや古い様相、丸底のものが突帯文出現期前後に位置づけられるほかは時期を同定することは困難である。

原田遺跡では、板屋Ⅲ遺跡に多くみられた有文浅鉢（3～5）はなく、浅鉢は無文である。これは、滋賀里Ⅱ式以前の土器が混じっていないことを示す。深鉢の状況から原田遺跡の浅鉢は大部分が篠原式に並行すると考えられる。

長頸浅鉢a（15～17・20～22・26～30）は、原田遺跡出土浅鉢の大半を占める。口縁上端が明瞭に屈曲するもの（15～17）は小片が少数出土しているにすぎず、篠原式段階ではこの口縁部の浅鉢は衰退していくと思われる。そのほかの浅鉢aは、板屋Ⅲ遺跡の有文浅鉢が無文化したもので、全体の器形は変わらないもの（21～22）と、口頸部がいっそう長いもの（26～28）がある。後者が突帯文直前に位置づけられるように思われるが、確たる根拠があるわけではなく、あるいは篠原式の古い段階から共存しているかもしれない。

短頸浅鉢bは、口縁端部が単純なもの（19）と玉縁状に肥厚するもの（36）があるが、後者はわずかである。口縁端部が玉縁状に肥厚する浅鉢は、突帯文直前に位置づけられることが多い。神原Ⅱ遺跡ではこのような浅鉢がまとまって出土しており、深鉢の出土状況から考えて単純口縁の浅鉢が古いように思われる。椀形の浅鉢eと皿形の浅鉢fは、時期の特定は困難である。

4．晩期前半の編年概略と今後の課題

以上をもとに第1図に晩期初頭から突帯文出現までの編年案、第1表に周辺地域との対照を示すが、これは熟考を重ねたものではなくあくまで素案である。大筋としては、板屋Ⅲ遺跡旧河道出土土器群から原田遺跡Ⅱ群2類土器を引いたものを滋賀里Ⅲa式以前とし、その中から滋賀里2式に類似した土器を滋賀里Ⅱa式並行、同Ⅲa式に類似したものをⅢa式並行とした。原田遺跡Ⅱ群2類は新・古の2段階とし、神原Ⅱ遺跡出土土器をその後に位置づけた。これらは篠原式各段階に相当すると思われる。ただし、深鉢と浅鉢の同時性については、未だに不確定要素が多いことを断っておく。

原田遺跡の調査で、山陰地方における篠原式並行の土器群の様相が明らかになってきたといえる。しかし、後期末から晩期前葉の滋賀里Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲa式に並行する土器群については未分離の状

態である。山陰地方でこれらの型式に対応する土器群を明確にすることが急務である。各地域との並行関係についても、十分な考察ができたとはいいがたく、さらに詰めた検討をしなければならない。近畿地方との並行だけでなく、北部および東九州との関係をにらんだ検討が必要である。以上の問題について、さらに考察を深めて将来稿を改めたい。

参考文献

岡田憲一 2000「西日本縄文後期後葉土器編年序説」『向出遺跡』大阪府教育委員会

清田純一 1998「縄文後・晩期土器考－中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について」『肥後考古第11号』肥後考古学会

島根県教育委員会 1998『板屋Ⅲ遺跡』

2003『神原Ⅱ遺跡』

水ノ江和同 1997「北部九州の縄文後・晩期土器」『縄文時代8』 縄文時代文化研究会

奈良大学文学部考古学研究室・秋篠山陵遺跡調査会 1998『秋篠・山陵遺跡』

平井勝「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代吉備第18集』 古代吉備研究会

家根祥多 1994「篠原式の提唱－神戸市篠原中町遺跡出土々器の検討」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』平成4年度科学研究費補助研究成果報告書（代表研究者：林謙作）

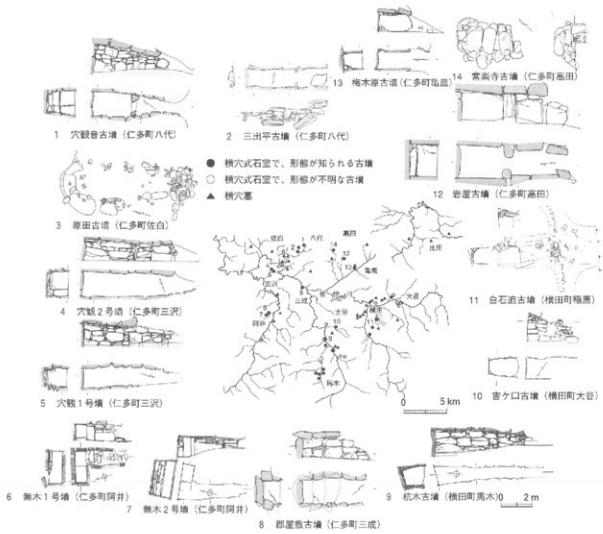
第７章　仁多郡における後期古墳の様相
－原田古墳の位置付けを中心に－

西尾　克己

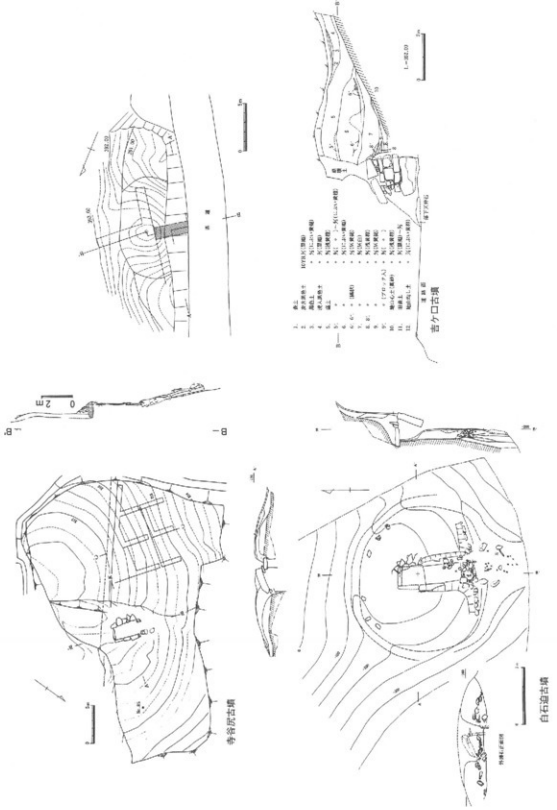
１，はじめに

仁多郡仁多町佐白の斐伊川左岸の段丘上で原田古墳が発掘され、環頭大刀や金銅装馬具などの豊富な副葬品が出土し、多方面から注目されている。しかし、これまでは斐伊川や飯梨川下流域の平野部の古墳をもって、出雲の古墳時代は語られてきたため、山間部については、実態が明らかではなかった。また、後期古墳の一部で発掘調査は行われているものの、出土品も限られ、後期古墳の調査・研究は進んでいない。

今回、原田古墳から多くの副葬品が発見されたので、仁多郡内の後期古墳の様子を概観し、原田古墳のもつ歴史的意義を探りたい。



第１図　仁多郡の横穴式石室分布図



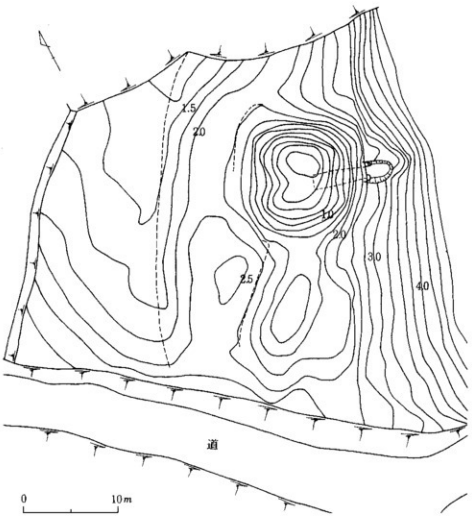
第２図　寺谷尻古墳・白石迫古墳・吉ケ口古墳測量図（各報告書より転載）

2，墳丘形態と規模

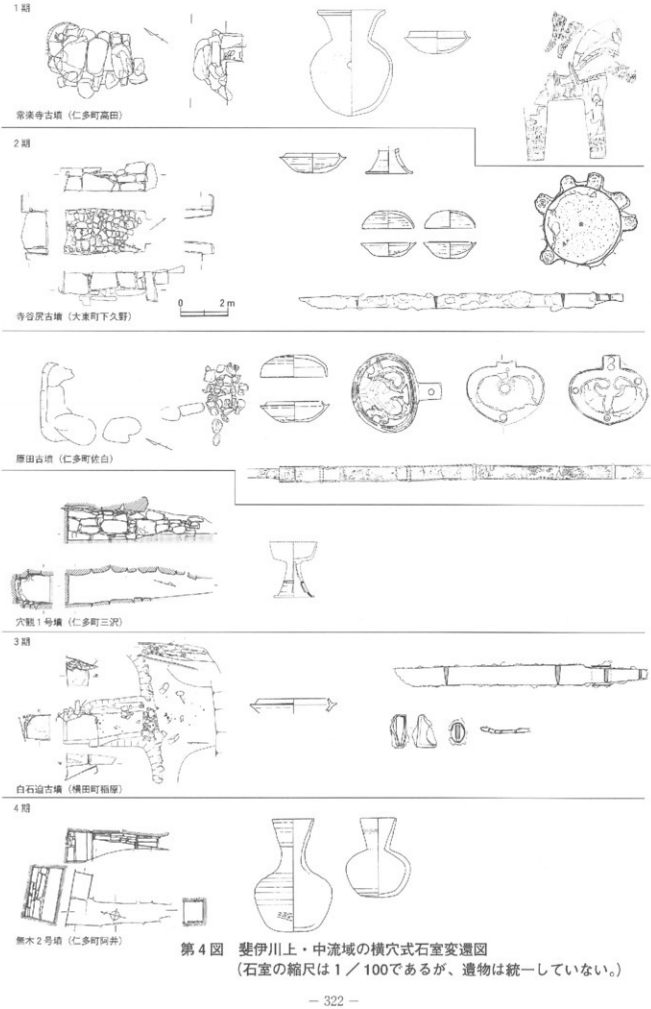
仁多郡の後期古墳で明らかに墳丘の形態が分かるものは少ない。前方後円墳としては22.8 mの仁多町布施の穴観音1号墳（注1）が知られ、前方後方墳としては全長29 mの仁多町三沢の穴観2号墳（注2）がある。2基とも丘陵上に築かれ、前者が全長5.6 m、後者が全長7.5 mの横穴式石室をもつ。他の古墳は円墳である。今のところ明確に方墳と知られている古墳はない。円墳の多くは径7 mから径15 mまでの規模である。古墳規模が径15 mのものとしては穴観1号墳と岩屋古墳の2基で、小規模な墳丘としては径8 mの梅木原古墳や後述する白石迫古墳がある。

墳丘の築造方法については、第2図のように幾つかの調査例で分かってきている。以下、調査が行われた古墳の概略を述べる。

寺谷尻古墳（注3）は仁多郡に隣接する大原郡大東町下久野の丘陵北斜面に所在する。径10 mの円墳で、発掘により横穴式石室と墳丘の築造方法が知れる。石室は両袖式で、玄室は奥壁での幅1.8 m、奥行き3.1 mである。奥壁の背後にある地山は3 m程水平となり、斜めに立ち上がる。溝等は掘られていない。副葬品には直刀1本、刀子5本以上、雲珠1個、鉄鏃2本、須恵器蓋坏の蓋と身が各3セットである。須恵器蓋坏は出雲4期・5期（注4）のもので、築造は4期と推定される。



第3図　穴観2号墳墳丘測量図
（『古代の出雲を考える』2　出雲考古学研究会　1980より）



第4図　斐伊川上・中流域の横穴式石室変遷図
（石室の縮尺は1／100であるが、遺物は統一していない。）

白石迫古墳（注５）は横田町大字稲原の丘陵先端に位置する。墳丘は東西 7.8 m、南北 6.5 mの円墳で、幅 0.5 ～ 0.6 mの周溝をもつ。しかし、周溝は石室の前面では低い位置にあるが、裏側になるにつれて高さが上がる。奥壁の背後では最も高く、深さは極めて浅くなる。墳丘肩部には貼石が点在する。第２図のように、奥壁の背後の地山は浅く掘られていて、C字形をなし、前庭平面へと続く。玄室は奥壁での幅 1.0 m、奥行き 2.95 mである。石室の平面プランは袖無式で、大きな板石を立てて奥壁や側壁を構築している。石室の前の墳裾には左右に積石が２mずつ確認されている。遺物としては、直刀１本、鉄鏃１本、須恵器の坏身の破片などが出土している。須恵器は出雲５期である。

吉ケ口古墳（注６）は横田町大字大谷の丘陵の裾付近に所在する。径10mの円墳である。墳丘の周溝は明瞭ではなく（地山には達していない）、石室の裏の地山は奥壁の背後で斜めに上がる。石室は割石積みで、奥壁幅1.35mと小さい。出土品がなく、築造時期は不明である。

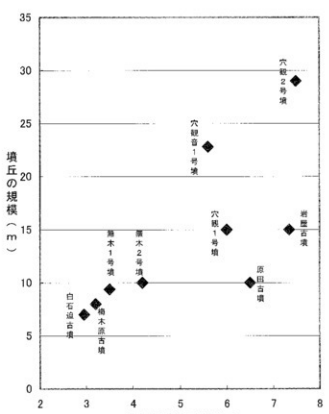
以上のように築造について記した。これを参考に原田古墳の築造方法をみると、墳丘規模は 10 m程で、仁多郡では普通の大きさである。また、原田古墳は斐伊川の川岸に接して造られている。対岸の三沢地区の林原から古墳を見ると、前方がすぐに斐伊川の河道となり、その比高も考慮すれば、実際より大きく見えたはずである。一方、背後の斜面はほとんど加工していないことから、南を意識した古墳といえる。

3，横穴式石室の規模

横穴式石室で、玄室と羨道部が分かるものは必ずしも多くない。未発掘の古墳が大部分であり、また、石室の開口が古く、羨道部が崩壊したものもある。第１表のように、石室の全長をみると、穴観２号墳が７m50㎝で最大規模をもち、次が仁多町亀嵩の岩屋古墳の７m35㎝で、これらに続くのが原山古墳の６m50㎝である。一方、小規模なものは横田町稲原の白石迫古墳の２m95㎝である。石室の奥行の平均は５m28㎝となる。

第１表　仁多郡の横穴式石室・墳丘規模

石室の奥壁の幅は、最大が岩屋古墳の 2.1 mで、次が郡屋敷古墳や穴観２号墳の 1.6 mである。狭いのは梅木原古墳や白石迫古墳の１m程である。幅１mとは横穴墓の終末期の幅程でしかなく、単葬墓として構築されていた可能性がある。原田古墳は石室の石材が既になく、確かめられないが、西側の抜取り跡や遺物



出土状況より幅は２m前後あったと推定される。

このように比較してみると、原田古墳の横穴式石室は仁多郡では最大規模ではないが、大きな石室の一つといえる。

4，横穴式石室の形態と時期

仁多郡の横穴式石室（第１図）は花崗岩の自然石や割石を使ったものが多い。また、石室の形態については袖石をもつものと、もたない無袖のものがある。以前に、中濱久喜氏によりA～F類まで分類されている（注７）。A類は自然石や割石で無袖式のもので、穴観１・２号墳、杭木古墳など多くが該当する。B類はA類に袖をもつもので、常楽寺古墳、穴観音１号墳が挙げられる。C類は各壁の石を板状の石を立てたもので、白石迫古墳、梅木原古墳がある。D類は玄室の各壁は１枚を基調とし、門柱石をもつもので、岩屋古墳のみである。E類はD類より小規模なもので、１例が挙げられている。F類は平面プランがL字状になり、玄室が横長になる特異な構造の石室である。今のところ、無木１・２号墳の２例のみである。

近年、角田徳幸氏により出雲山間部の石室を大きく３期に分けられている（注８）。１期は横穴式石室の受容期で、中濱氏のB類にあたる袖石をもつ石室であり、常楽寺古墳が挙げられる。石室は、未調査のため詳細は不明であるが、須恵器の坏・蓋や馬形埴輪などが出土している。６世紀後半とする。２期は狭長な平面プランをもつ石室が現れる段階とし、形態的には両袖式と無袖式の両者が存在する。６世紀後半から７世紀の前半とされている。６世紀後半のものとしては穴観２号墳と穴観音１号墳が挙げられている。３期は横穴式石室の終末期と捉え、D類の岩屋古墳の玄室の各壁を１枚石とすることを基調としたものとする。岩屋古墳は山陽方面の影響も考えられている。また、F類の無木１・２号墳もこの期に入れられている。なお、この類は出雲平原部の石棺式石室の影響との見方もある（注９）。

以上の成果を踏まえ、出土している須恵器の時期を参考にして、整理すると第４図のようになる。

１期は角田氏の１期に含まれ、出雲３期に該当する。常楽寺古墳の出土の須恵器は大形甕で、蓋坏の身も蓋受け部分も長い。残念ながら、常楽寺古墳の石室は未調査のため実態が分からないので、内部構造の詳細は知れない。ただし、玄門に袖石をもつ両袖式石室である。仁多郡では、この期の石室は他になく、横穴式石室の導入期といえる。

２期は出雲４期に含まれ、角田氏の指摘のとおり、石室形態では両袖式と無袖式の両者が存在する。仁多郡ではないが、隣接する大原郡大東町の寺谷尻古墳がこの時期の古墳である。袖石をもつ石室で、１期にされているが、出土している須恵器の中で古いものは出雲４期であり、２期とする。袖石をもつ穴観音１号墳もこの時期と考えられる。また、穴観１号墳は高坏しか知られていないが、縦長プランで、壁は割石積みのため、ここでは２期に入れる。石室は無袖式である。原田古墳も出土している須恵器からこの期に属する。しかし、石材が抜かれており、石室の形態は分からない。残った羨道部にある石材や玄室の抜取り跡から類推するしかない。なお、仁多郡ではこの期に多くの石室が営まれている。

３期は出雲５期に当たる。１枚石を基調とする石室で、横田町の白石迫古墳が該当する。出土している須恵器の蓋坏の身も蓋受け部分が短い。仁多町の岩屋古墳や梅木原古墳は出土品が知られていないが、３期に含まれるであろう。

４期には仁多町の無木１・２号墳がある（注10）。２号墳から壺が２個出土している。横穴墓か

ら出る例が多く、出雲6期と推定される。同じ形態の横穴式石室はないが、最終末にあたると推定される。この時期になると古墳も横穴墓もほとんど造られなくなる。

5，原田古墳の位置と横穴式石室をもつ古墳の分布

仁多郡の後期古墳の分布については中濱氏の成果に負うところが多く（注11）、既に指摘されているとおり、横田町横田、同馬木、仁多町阿井、同三成・三沢、同布施（注12）、同亀嵩の地域に区分される。横田町横田、同馬木には小規模な古墳が多く造られている。一方、原田古墳より大規模な墳丘や大きな石室をもつ古墳は次のとおりである。穴観2号墳（三沢）、穴観音1号墳（布施）、岩屋古墳（亀嵩）、穴観1号墳（三沢）、郡屋敷古墳（三成）である。いずれも、仁多町内に分布し、『出雲国風土記』の仁多郡三沢郷、布勢郷、三処郷にあたる。三処郷は奈良時代に郡家が置かれた郷である。奈良時代の遺跡としては高田廃寺や「厨」が墨書された須恵器が出土した芝原遺跡（注13）がある。三沢郷と布勢郷は斐伊川沿いの郷で前者が左岸、後者は右岸である。この地域は古墳時代後期から奈良時代にかけて主要な地域であったと考えられる。特に、木次町大字北原本郷の下布施では精錬鍛冶の製鉄遺跡である寺田Ⅰ遺跡が知られている。原田遺跡では既に記したように、鍛冶炉をもつ掘立柱建物が検出されている。律令体制前代の古墳時代後期において、仁多地方は鉄製産（注14）を抜きにしては古墳文化は考え難い。しかし、現段階ではそれを裏付ける資料はなく、今後の考古資料の発見を待ちたい。

原田古墳は斐伊川右岸の河岸段丘上に位置するので、川堺（注15）であったと推定される両郷の中間に造られたことになる。斐伊川を挟んだ南側の三沢の丘陵上には穴観古墳群があり、北側の布施の丘陵には穴観音1号墳が知られる。また、斐伊川上流の三成の河岸段丘には郡屋敷古墳が所在し、どちらの勢力とも接する場所に原田古墳は所在していることになる。原田古墳の被葬者は各集団と関係をもちながら成長してきた勢力と推定される。

注1　『前方後円墳集成－補遺編－』山川出版社　2000
注2　『古代の出雲を考える2－西谷墳墓群－』出雲考古学研究会　1980
注1　『寺谷尻古墳・段たたら跡』大東町教育委員会　1996
注4　大谷晃二「出雲地方の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11　島根考古学会　1994
　　による。
注5　『大呂・川向古墳群、白石迫古墳発掘調査報告書』横田町教育委員会　1993
　　杉原清一氏の教示を得た。
注6　『吉ケ口古墳発掘調査報告書』横田町教育委員会　1995
注7　中濱久喜「出雲地方における後期古墳文化の展開－特に山間部を中心にして－」
　　『松江考古』4　松江考古学談話会　1981
注8　角田徳幸「島根県の横穴式石室」『芸備』26　芸備友の会　1997
注9　蓮岡法暲「島根県仁多町無木古墳群の横穴式石室について」『山陰考古学の諸問題』1986
注10　角田徳幸氏は3期とし、岩屋古墳と同期とされているが、出土の須恵器や石室の構造より後
　　出の古墳とし、分けたがよいと判断される。なお、同じ横長の玄室は広島県の神谷2号墳や兵
　　庫県の古墳がある。角田氏の教示による。
注11　注4と中濱久喜「仁多地域の古墳文化と『出雲国風土記』」『風土記論叢』1　出雲国風土

記研究会　1882の成果による。

注12　布施の中に仁多町大字の八代と佐白がある。

注13『芝原遺跡他－高田小学校建設予定地内発掘調査報告書－』仁多町教育委員会　1994
芝原遺跡では奈良時代の鍛冶遺構も検出されている。

注14　古墳時代後期の製鉄遺跡としては、出雲部の羽森第３遺跡（飯石郡掛合町）と石見部の今佐山遺跡（邑智郡瑞穂町）が知られる。この時期に、出雲部、石見部の山間部では製鉄が開始されていることが知られる。

『飯石地区農道離着陸場整備事業に伴う羽森第２、羽森第３遺跡発掘調査報告書』掛合町教育委員会　1998

『中国横断道自動車道広島浜山線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　島根県教育委員会　1992

注15　大字三沢と大字佐白の堺は斐伊川である。

参考文献（本章で、注として掲載したものは除く。）

「穴観２号墳」『古代の出雲を考える』２　出雲考古学研究会　1980
『発掘調査報告書－常楽寺古墳－』仁多町教育委員会　1985
『郡屋敷古墳－調査と石室の移築－』仁多町教育委員会　1985
「三出平古墳」『布施地区埋蔵文化財調査報告書』仁多町教育委員会　199
『古代の出雲を考える６－石棺式石室の研究－』出雲考古学研究会　1987

第８章　装飾付大刀と金銅装馬具の評価

松尾　充晶

１．はじめに

原田古墳からは双龍環頭大刀１振りと馬具１組が出土している。これらは金銅装の優品であり、副葬された被葬者の階層や職能をうかがわせる重要な資料といえる。以下では、これらの資料の特徴と位置づけについて述べ、原田古墳全体の評価を行う手がかりを供したい。

２．装飾付大刀の特徴と評価

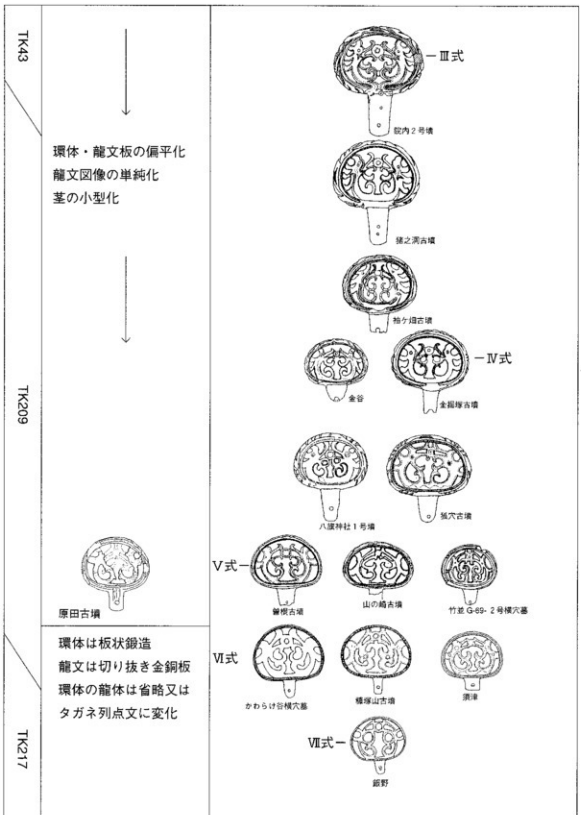
金銅装双龍環頭大刀１振りが出土している。双龍環頭大刀の型式変化を端的に表すものとして柄頭の属性分析が重要である。本例柄頭の特徴は下記のとおり。

・環体と龍文板を鋳造別造り、鍔鋲付によって固定する[1]。
・龍文板は偏平な板状、タガネ打ちによる列点で目などを表現する。
・龍文図像は省略化され、角、冠毛は１匹の龍につき２箇所。
・峯は短く小型である。
・環体の半肉龍体表現は省略され、幾何学的な蛇行溝に置き換わっている。

上記にあげた特徴は型式変化を端的に反映するものとして重要視される[2]。双龍環頭大刀の柄頭は、龍文図像の省略化や鋳造から鍛造へという成形技法の変化、それに応じた半肉彫状の立体表現からタガネ加工による平面的表現へ、といった大きな流れの方向性が明らかになっている。その変遷過程について整理した新納泉氏の型式分類[3]に照らせば、本例は双龍環頭Ⅴ式と位置づけられよう[4]。新納氏は双龍環頭Ⅲ～Ⅴ式の型式変化について明確な段階指標を示していないため、この段階の図像変化過程については実例をあげて整理した橋本英将氏の変遷図[5]を参照する（第１図）。本例は「院内系列」とされる主要系列に含まれ、龍文のモチーフを踏襲しながらも文様退化がかなり進んだ段階と評価できる。参考までに県内出土資料と比較すれば、安来市高広ⅣK１号横穴墓[6]（双龍環頭Ⅲ式）と、同かわらけ谷横穴墓群[7]・大原郡加茂町三代古墳[8]（同Ⅳ式）との間に位置づけられる。

新納氏の設定したⅢ～Ⅴ式の変化は、環体・龍文板の偏平化、文様図像の単純化を指標に、無段階な漸移的変化として認められる。資料ごとの個体差も大きい。これに対してⅥ式への変化は大きな変革である[9]。このⅥ式は資料数も多く、合理化と画一化が進んだ量産型式といえる。原田古墳例はその変革の直前段階と評価できよう。なお柄頭以外の拵え全体では、他の比較資料に良好なものが少ないため検討が難しいが、下記の点を特徴として指摘しうる。まず、鞘断面形が緩やかな稜をもつ八角形をなす点、これはⅤ式以前に一般的で比較的古い要素を残している。一方、佩用装置は断面が薄い蒲鉾形の責金具に小環をつけた、環付足金物による２足佩用であったと想定され[10]、Ⅵ式で定着する新しい要素を示す。以上の過渡的様相は柄頭の評価と一致している。

上記の新納双龍環頭Ⅲ～Ⅵ式の資料群はおおむね陶邑TK209型式併行期の須恵器と共伴する。これはほぼ出雲４期にあたる。大刀柄頭の型式であえて細分すれば[11]、Ⅴ式である原田古墳例はTK209型式併行期のなかでも新相を示すことになる。これは後述する共伴した馬具の年代とも合致する。なお、石室内から出土した須恵器は出雲４期ものでこれと矛盾しない。



右枠内変遷図は橋本英将氏註(5)文献より転載、型式名を加筆したものは、新納泉氏註(3)文献の標識資料

第１図　原田古墳環頭大刀の位置づけ（Ｓ＝１／５）

3．金銅装馬具の特徴と評価

石室が大規模な改変を受けているため、馬具は散逸がひどく失われた部分も多い。また個々の破損も大きく遺存状態は極めて悪い。限られた資料であるが、出土したものを第2図にまとめた。轡、杏葉、雲珠・辻金具といった基本的な馬装具が金銅装製品であるほか、鞍・鐙の一部[12]と帯先金具や鉸具などの付属的な部品が残されている。欠落が多いが、基本的に金銅装の馬装具一式が副葬されていたとみてよい。

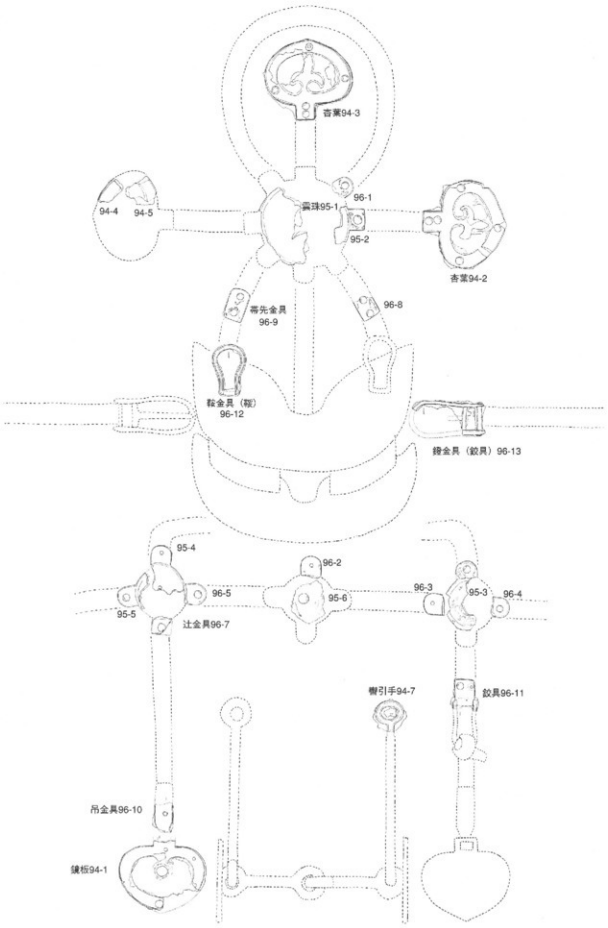
原田古墳出土馬具の特徴は下記のとおり。

・轡鏡板と杏葉は三葉文心葉形で、同一意匠である。
・鏡板の地板に直接衝先環をかしめて固定する。文様板に半球状のふくらみは無い。
・鏡板と杏葉では懸垂方法が異なる。鏡板は方形立聞孔＋吊金具、杏葉は鋲留め。
・雲珠、辻金具は半球状鉢で肩に稜あり。宝珠飾は座金具無し[13]。凹線や段は無い。
・　〃　　脚は方形と半円形が混在、1鋲で責金具無し。

馬装の出自を端的に示す轡鏡板と杏葉は同一の意匠を採用している。これは桃崎祐輔氏が「ともづくり」と呼ぶセット関係で、氏が指摘するようにTK209型式併行期～TK217型式併行期にみられる[14]。同意匠の関連資料との関係を第3図に示した。変化の方向性として、縁板に打たれた鋲数の減少や、懸垂方法が方形立聞孔＋吊金具から鋲留へという流れが読み取れる。こうした変遷大枠は轅葉形鏡板・杏葉など他の意匠形式とも基本的に同調するものである[15]。

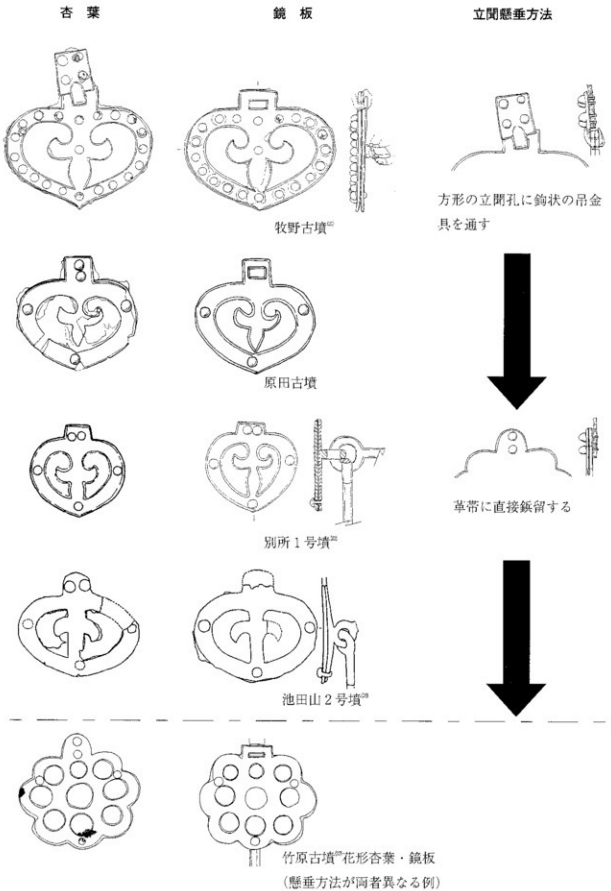
原田古墳例を評価する上で注目されるのは、懸垂方法が鏡板と杏葉とで異なる点である。このような事例は花形鏡板・杏葉の福岡県竹原古墳例（第3図）が知られ、小野山節氏は熟練した工人が鏡板を、経験の浅い工人が杏葉を製作した結果と想定した[16]。小野山氏の論旨は、国内での技術体系が未成熟で、技術力の習熟差をもつ工人が包括して編成されているという点にある。その見解は別として、実例としてあげられた竹原古墳の花形鏡板と杏葉が果たして別工人の手によるものかは慎重な判断を要する。竹原古墳例、原田古墳例ともに懸垂方法（立聞形態）以外は鏡板と杏葉の製作技法が共通し、技術力の差を読み取ることはできない[17]。基本的に同一の製作者によるものであろう。とすれば、懸垂方法の違いは製作技術差ではなく、使用時に取り外しを想定するかどうかの意図的なものと理解しうる。立聞を吊金具のフックで垂下すれば取り外しが可能であるが、鋲留すると固定されたままとなる。杏葉は尻繋の革帯に固定したままでも装着は容易であるが、轡が面繋と一体では馬に装着しにくい。このことを想定して杏葉のみを鋲留する過渡的手法があり、その後に省力化が進んで鏡板ともに鋲留する例が増加していくと考えられる[18]。立聞を鋲留する技法はTK209型式併行期のなかでも新しい段階に出現し、TK217型式併行期に定着採用される。原田古墳の馬具はTK209型式併行期と判断される[19]ことから、上記の年代観にも整合する。

轡の鏡板と銜を結合する技法については、興味深い知見が得られた。鏡板中央に円孔がうがたれ、銜先環の端部をかしめて鍛接することによって銜を結合していたことがうかがえる。破損面ながら円孔の縁は斜めにテーパーがつく。鍛接面積を増やし、かつ、かしめた先端が盛り上がることを防ぐ工夫とみられる。このような銜と鏡板の連結方法については以前整理したことがあるが[20]、かしめた先端の盛り上がりを平坦に処理することによって、半球形のふくらみ（覆い部）をもたない平坦な上板（縁板＋文様板）を被せる技法が成立する（第4図Ⅲ－B類）。これによって杏葉と全く

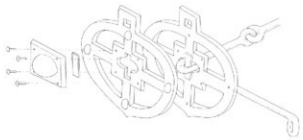


※数字は挿図番号と対応

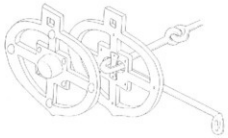
第２図　原田古墳出土馬具構成図（Ｓ＝１／４）



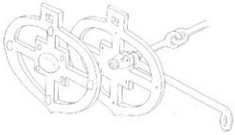
第3図　類例杏葉・鏡板との比較（S＝1／4）



Ⅰ類
連結軸を使用し、別造りの覆い金具をかぶせる

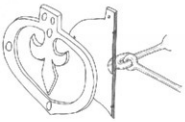


Ⅱ類
連結軸を使用し、上板と一体造りの（半球状）覆い部で隠す。



Ⅲ類
銜先環を直接かしめて固定する

（Ⅲ－A類）
上板と一体造りの（半球状）覆い部でかしめたふくらみを隠す。



（Ⅲ－B類）
かしめた部分を平坦に仕上げ、覆い部のない平坦な上板(杏葉と同様)をかさねる。＝ともづくり

（Ⅲ－C類）
上板をかさねないため、かしめた部分が露出する。

第４図　轡（鏡板と銜）の連結方法分類

同じ外見を呈するともづくりの馬具セットが製作された。その技法は奈良県牧野古墳[22]の事例で達成され、その後は静岡県別所1号墳[23]など三葉文心葉形の鏡板に多用される[24]。

雲珠・辻金具は破損が大きいが、特徴から宮代栄一氏の分類する「半球状有稜鉢」[25]にあたる。この型式について宮代氏はTK217型式併行期に一般的な型式と評価している。また辻金具は3個体の存在が確認できる。それ以上あった可能性も否定できないが、8脚雲珠＋4脚辻金具3個という組み合わせは同時期に類例が知られるため本来3個体であったともみられる。この場合、3個の辻金具の位置は尻繋ではなく、鈹具（第96図11）とともに面繋に用いられた可能性が高い[26]。

以上検討を加えた馬具年代の位置づけについて総括すると、TK209型式併行期のなかでも新しい様相をかし、TK217型式併行期における終末期馬具への過渡的要素を含む金銅装馬具セット、といえる。

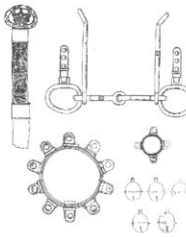
4．まとめ

以上、原田古墳から出土した装飾付大刀と金銅装馬具について、先行研究に照らして位置づけをおこなった。年代的にはTK209型式併行期（出雲4期）のなかでも新段階[27]の組み合わせと評価できる。その内容は金銅装を多用した豪奢なものであった。これらは倭王権の中枢に管理された生産体制下で集中的に製作され、列島内に広く賜与された規格性の高いものと評価されている。

これらの器物を所有しえた原山古墳の被葬者は、単に独自の経済活動によってその社会的優位性を確立したとは考えがたい。つまり、出雲地域内では平野部に君臨し伝統的な支配基盤をすでに築いていた出雲東西部の在地首長層が存在し、また広くは規格的な大刀や馬具を生産・配与する主体となった畿内中央の大有力氏族がいる。原田古墳の被葬者はそれぞれとの交渉の結果、相対的に社会的位置を獲得し、また保証される関係にあったであろう。原田古墳が築かれた、後の三沢郷、布施郷にあたる地域ではこれに前後する他から卓越した首長墳が知られていない。また原田古墳自身の石室規模も仁多郡周辺では「中の上」クラスで、特に傑出したものではない。果たしてこの人物が、伝統的にこの地域に根ざしていた氏族が伸長し特定の職能を与えられたものか、あるいは他所から派遣されてきた官僚的な人物であるかを語るすべはないが、いずれにせよその階層と地位の獲得には他律的な外因がおおきく働いたとみるべきであろう。

原田古墳被葬者の階層や職掌を考えるうえで、比較対照として出雲地域で出土した装飾付大刀と金銅装馬具のセット関係を第5図、第6図に図示した。出雲の古墳時代政治史は出雲東西部の大首長を軸に語られることが多く、仁多郡などの山間部の評価が正当に組上にあがる機会が少なかった、という反省点は確かにあるが、実際のところ金銅装の大刀と馬具の両者を副葬する古墳は出雲東西の大首長系列に限られていることにあらためて気づく。結論から言えば、原田古墳はそうした東西大首長系列以外の地域から初めて「最高ランクの」馬具セットと大刀が出土した事例である。出雲4期でみれば、同時期に比肩する内容をもつのはわずかに放れ山古墳のみである[28]。出雲の考古学関係者にわかり易く表現するならば、「原山古墳は放れ山クラスの古墳である」ということができる。つまり、最上位首長に次ぐ規模の石室で、複数セットではないが一通りの金ぴか馬具と大刀をもち、耳環や玉類など装身具と、鉄鏃、刀子など定番の副葬品を欠かさず副葬する古墳、ということである。

可耕地が少なく安定した生産基盤の無い地域に、なぜ原田古墳のような卓越した所有品が副葬されたか、現状で結論を出すことはできないが、やはり注意されるのは鉄生産とのかかわりである。

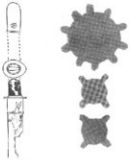


1．御崎山古墳

大刀＋鉄矛＋金辻＋鈴

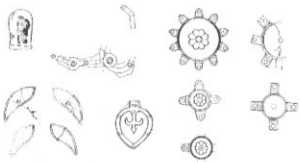
2．岡田山１号墳

大刀３＋金銅＋金辻＋金鞍＋鈴



3．古天神古墳

大刀＋鉄矛＋金辻



4．妙蓮寺山古墳

大刀＋金矛＋金辻＋金鞍＋金杏

第５図　出雲地域の装飾大刀と馬具構成①
（鞍金具Ｓ＝１／16、他はＳ＝１／８）

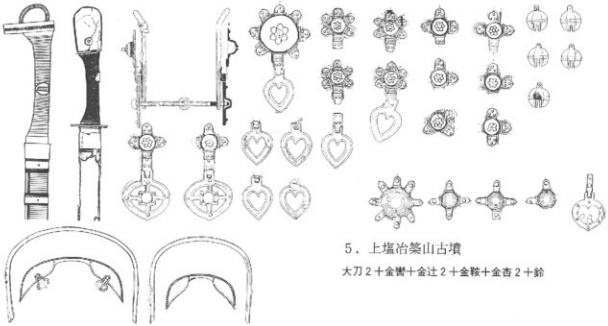
表１　出雲東西の首長墳と仁多郡周辺の主要古墳

須恵器編年		仁多郡（大原郡含）	西部（神戸川下流域）		東部（斐伊川・意宇川流域）				安来平野（大刀出土横穴墓）
陶邑	出雲		今市・塩冶古墳群	古志古墳群	山代・大寺古墳群	岩口古墳群	大草谷古墳群	大橋川南岸	
TK10	2期				山代二子塚■ 92		大草谷古墳■ 25		
TK43	3期	雷神字〇 16	大念寺● 38 上塩冶築山〇 40	妙蓮寺山● 49	来美寺● 62	御崎山■ 40 岡田山１号■ 22	古天神■ 24	手間● 67	
TK209	4期	寺谷尻〇 10 大観音１号● 22.8 大観１号〇 15 菅原〇 16 三代古墳〇 10	上塩冶 33 支群 ３号横穴Ω	牧山山〇 13 宝塚？ 大塚？	向山１号■ 955 山代方墳□ 45	石屋後？ 間屋？			後の迫横穴Ω 波佐谷区１号Ω 台ケクリ 52 号Ω
TK217a・6期		口石迫〇 7 狐塚〇 15 権本原〇 8 下若狭１号Ω	地蔵山〇？		永久宅後？				鳥本Ω 中山Ω かわら村谷Ω

●前方後円墳、■前方後方墳、〇円墳、□方墳を示す。数字は墳丘規模。石室や大刀・馬具編年からあてはめたものもある。須恵器型式内の細分は、石室編年等による。

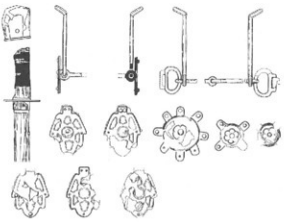
以下の文献を参考にした。

大谷晃二1999「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター、大谷晃二2003「宮山古墳群をめぐる諸問題」『宮山古墳群の研究』島根県教育委員会、山陰考古学研究会1996『山陰の横穴式石室』



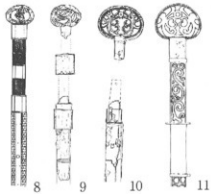
5．上塩冶築山古墳

大刀２＋金銅＋金辻２＋金鞍＋金杏２＋鈴



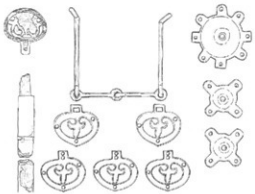
6．放れ山古墳

大刀＋金銅＋鉄鋲＋金辻＋金杏



8　9　10　11

12　13



7．原田古墳

大刀＋金銅＋金辻＋金杏

8．鷺の湯病院跡横穴墓

9．曰コクリＳ－２号横穴墓

10．高広Ⅳ区１号横穴墓

11．かわらけ谷横穴墓

12．上塩冶第33支群１号横穴墓

13．三代古墳

環頭大刀のみ

第６図　出雲地域の装飾大刀と馬具構成②

近接する木次町には金銅製刀子が出土した平ヶ廻横穴墓や、特異な金銀装大刀が出土した下布施横穴墓があり、その成立背景についても鉄生産による地理的重要性が指摘されたことがある[31]。下布施1号横穴墓から出土した金銀装大刀が極めて特異な構造であったため、同遺跡の報告書において筆者も「一元的な装飾付大刀の製作技術とは異なる点で、地方生産も含めた特別な生産体制が考えられ、その配布・入手経路においても単純に畿内政権における小地域の把握だけではない特殊な背景を想定すべきである。」と延べたことがある。ここで想定したのはこの地域が鉄生産を背景に生産力と経済的地位の優位性を獲得し、主体的かつ自律的に装飾大刀や刀子を身に帯びる、という図式であった。ところが今回、原田古墳に副葬されていた馬具や大刀は、畿内の王権が主体となって構築した身分表徴システムで機能する器財であり、下布施横穴墓例とは基本的性格が異なる。想像するに、出雲4期に畿内王権主導のもとで置かれた（あるいは在地中小氏族から登用された）官人的職能をもつ人物が原田古墳被葬者であり、その後出雲5期の段階では主体的な優位性を獲得して独自の大刀（"官人的"な方頭大刀ではなく）を入手することができたのであろうか。いずれにせよ、歴史叙述をするには資料が限られ想像の域を出ることはできない。畿内王権にとって重視された生産の場そのもの（出雲の場合は玉作や製鉄）に、必ずしも"畿内的"な古墳の出現や凝集がみられる訳ではないという現象も、評価を難しくしている。今のところ、原田古墳と鉄生産を結びつける直接的な根拠は無いと言わざるを得ない。

（松尾　充晶）

【註】

(1)柄頭の成形・接合方法はX線ラジオグラフィー観察と蛍光X線分析によって判断されている。

(2)そのほかの特徴として、龍文の尾に羽毛表現の小突起がある点などがあげられる。

(3)新納泉 1983「武器」『湯舟坂二号墳』京都府久美浜町文化財調査報告　第7集　久美浜町教育委員会

(4)元興寺文化財研究所による事実報告文中（本書165 p）では本例をⅣ式と位置づけている。新納泉氏の型式設定は無段階に変化する属性を相対的な指標により区分しているため、解釈によってはこのように型式の見解が異なる場合がある。本稿でⅤ式と位置づけた点は筆者の責による。

(5)橋本英将 2003「外装からみる装飾大刀」『鉄器研究の方向性を探る』第9回鉄器文化研究集会　発表要旨集

(6)島根県教育委員会 1984『高広遺跡発掘調査報告書』

(7)島根県教育委員会 2001『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 10

(8)蓮岡法暲1984「三代古墳」『加茂町誌』加茂町誌編纂会

(9)成形に鋳造を一切用いず、環体は偏平な鍛造、龍文板は金銅板切り抜き、タガネ列点による平面的加飾のみという変化を指す。

(10)実際には破損により小環は残されていなかったため、断定することはできない。

(11)Ⅲ～Ⅵ式は須恵器1型式の時間幅のなかで変化し、製作時の時間差を示す。これはおおまかに副葬された古墳の前後関係に反映される。つまり、Ⅲ式よりⅥ式を副葬する古墳・横穴墓が墳丘・石室や他の副葬品において新しい様相を示す。しかし細かい柄頭型式差をもって副葬年代の差を言及する状況にはない。これは製作から副葬にいたる佩用期間の長短などに差異があり、副葬年代に逆転が起こりうるためと考えられる。

(12)鐙は懸垂する鐙靼の上端に用いられた可能性のある鉸具が1点、鞍は鞍が1点出土したのみである。

⑬本書 170 p の事実報告文中では雲珠にのみ座金具を伴う可能性が高い、としているが、この型式に座金具は用いられないと考えられる。なお、本資料に座金具の痕跡などは残っていない。

⑭桃崎祐輔 2001「鞍業形杏葉・鏡板の変遷とその意義」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 12 号　筑波大学歴史・人類学系

⑮桃崎祐輔 2002「旅内 37 号横穴墓出土馬具から復元される馬装について」『福島県文化財センター白河館　研究紀要 2001』福島県教育委員会

⑯小野山節 1990「古墳時代の馬具『日本馬具大鑑　第一巻古代上』日本中央競馬会、吉川弘文館

⑰特に原山古墳の鏡板と杏葉は平面形が重なることから、同一の型を共有する可能性が指摘されている（本書 169 p）。

⑱群馬県白石二子山古墳、静岡県仁田山ノ崎古墳例のように鏡板を鋲留、杏葉を吊金具で懸垂する例もある。同様に鋲留化への先駆形態と評価されている。（註⑭文献）

⑲原田内墳の石室出土須恵器は出雲 4 期（TK209 型式併行）で追葬が無いことから、馬具の年代は TK217 型式併行期まで下らない。

⑳松尾充晶 1999「上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 4　島根県古代文化センター

㉑広陵町教育委員会 1987『史跡　牧野古墳』広陵町文化財調査報告第 1 冊

㉒川江秀孝 1992「馬具」『静岡県史』資料編三　静岡県　別所 1 号墳例では衝先環を直接かしめるのではなく、円環（遊環）を介して連結される。

㉓他に福島県笊内 37 号横穴墓、島根県放れ山古墳のような鞍業形鏡板も製作されている。

㉔宮代栄一 1993「中央に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第 30 号　埼玉考古学会

㉕本書 170 p では「1 点の雲珠と 3 点の辻金具が尻繋を構成していたことになるが、これは杏葉の数や遺存する脚部の数とも矛盾しない。」と記述している。しかし辻金具 3 点を杏葉垂下位置に配置すると尻繋構造は整合的に復元できず、実際には矛盾を生じる。したがって辻金具 3 点を尻繋用とみるのは適当でない。また本書 169 p で「留め金具」とした鈹具（第 96 図 11）についても「革帯を介して、雲珠や杏葉の鈎金具に連結するものであり、」と記述しているが、これは面繋での用途が想定されているものである。

㉖望月薫弘編 1968『陵河池田山古墳』静岡英和女学院、註㉑文献より

㉗若宮町教育委員会 1982『竹原古墳』竹原古墳保存修理事業概要報告　若宮町文化財調査報告書第 4 集

㉘島根県教育委員会 1996『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ

㉙島根県教育委員会 1987『出雲岡田山古墳』

㉚島根県教育委員会 1964『妙蓮寺古墳調査報告』

㉛島根県古代文化センター 1999『上塩冶築山古墳の研究』－島根県古代文化センター調査研究報告書 4－

㉜山本清 1984「横穴被葬者の地位をめぐって」『島根考古学会誌』第 1 集　島根県考古学会

㉝島根県教育委員会 1994『臼コクリ遺跡・大原遺跡』一般国道 9 号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

㉞出雲市教育委員会 2004『上塩冶横穴墓群第 33 支群』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第 14 集

㉟馬具、装飾付大刀の編年研究から認識できる新古関係であり、須恵器のなかに新しい要素がみられるという意味ではない。

㊱出雲東部の首長墳が石棺式石室を採用し古くに開口している場合が多く、副葬品の内容が明らかでない、

という制約もある。

37)木次町教育委員会 2002『下布施横穴墓群　案久寺遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 4

第９章　自然科学分析

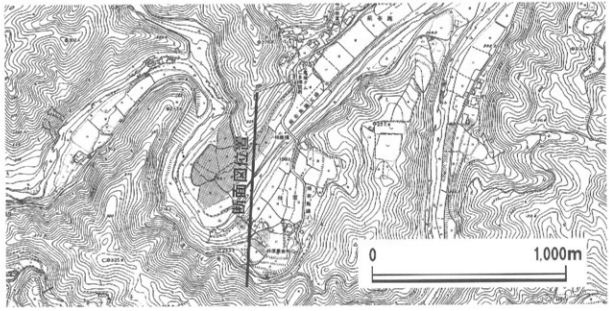
第１節　尾原ダム建設予定地内原田遺跡の立地と斐伊川

中村　唯史

はじめに

斐伊川は、船通山（標高 1,142 m）に流れを発し、奥出雲から出雲平野、宍道湖、中海を経て日本海に達する河川である。その流域は、出雲神話や青銅器に象徴される「古代出雲」の舞台であり、近世には日本一の製鉄地帯であった。製鉄は山地荒廃を招き、それによって流出した土砂は度重なる洪水を引き起こしたのみならず、下流部に厚く堆積して古代以前のこの地域の情報を覆い隠してしまっていた。しかし、近年、出雲平野東部で青木遺跡（出雲市）をはじめ重要な遺跡の発見が相次ぎ、近世以前の斐伊川流域の古景観復元が注目されている。尾原ダム地内の発掘調査では、斐伊川の河岸から縄文時代以降の遺構、遺物が次々に発見され、流域における人類の生業活動とともに、斐伊川の変遷の一端を垣間見ることができる。

地形的概要　尾原ダム建設予定地は、中国山地脊梁の北側にあり、仁多町と木次町にまたがっている。周辺は起伏に富んだ山間地であるが、ピークの標高は 300 ～ 400 mで概ね一定で、その高度は横田町から仁多町三成付近にかけての平坦面と等しく、「石見高原面」に相当する地形面とみられる。石見高原面は中国山地が隆起する過程で形成された平坦面で、島根県西部を中心に分布する地形面である。山陽側では「吉備高原面」と呼ばれる地形面がこれに相当する。斐伊川は石見高原面に対して蛇行穿谷して流れている。原田遺跡は、斐伊川が折り返すように時計回りに強く蛇行している



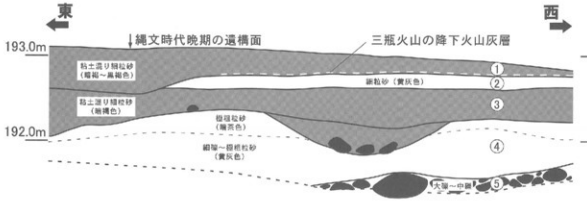
第１図　原田遺跡の位置と地形断面

地点の内側に発達した河岸段丘に立地している。河岸段丘上方の尾根は、浸食が進んだ“痩せ尾根”になっている（第１図）。

斐伊川流域の地質概要　斐伊川流域には、古第三紀の深成岩類（花崗岩および閃緑岩）が広く分布し、流域面積の大部分を占めている。尾原ダム建設予定地では、下流側に花崗岩、上流側に閃緑岩が分布していて、原田遺跡付近は閃緑岩の分布域である。その他に、源流域にあたる中国山地脊梁部には、白亜紀の流紋岩と同質の火砕岩が、海岸に近い下流域には新第三系の火山岩類および堆積岩類が分布している。深成岩類は風化が進んで砂状になった、いわゆる「マサ状」になっていることが多い。

かつての斐伊川流域では、これを切り崩して水路に流し、水流による比重選別で砂鉄（鉄鉱物）を採取する「鉄穴流し」が盛んに行われた。鉄穴流しに伴って掘削した跡地形と排土の堆積物は流域の各所にみることが出来る。

原田遺跡の堆積層　原田遺跡の堆積物は、河床から氾濫原、自然堤防に堆積したものである。河床の堆積物は、人頭大程度の礫を主体とする河床礫を伴い、河道形状を示す。河道を堆積する形で、重なる氾濫原および自然堤防の堆積物は細粒砂～泥分からなり、土壌化が進んで黒色土壌となっていることが多く、そこに氾濫時にもたらされた砂層が挟まれることがある。発掘によって確認された河床の堆積物は、縄文時代後期以前（時期未詳）、縄文時代晩期、奈良時代の３時期のものがある。縄文時代後期以前の河床堆積物は、その上位に重なる黒色土壌の上面付近が縄文時代晩期の遺構面である。黒色土壌には三瓶火山起源のデイサイト質火山灰が挟まれ、直下から3740yr.BPの放射性炭素年代が得られている（第２図）。縄文時代晩期と奈良時代の河床堆積物は、その中に含まれる遺物から年代を決定することができ、詳細は本報告書で記載されている。なお、これらの河床堆積物は、斐伊川の河道位置が変化する過程で部分的に残されたものである。そのため、堆積物としての連続性は悪く、時代的にもギャップがある。上記のように、河道を堆積する堆積物は比較的細粒な粒子からなり、基本的には上方で粒子が細かくなっている。しかし、原田遺跡で確認された中世から近世の堆積物は、上方へ粗粒化の傾向が認められる。上方への粗粒化は洪水堆積物でも認められるが、ここではかく乱を受けた層相や、風化した長石粒子を多く含んでいるという特徴か



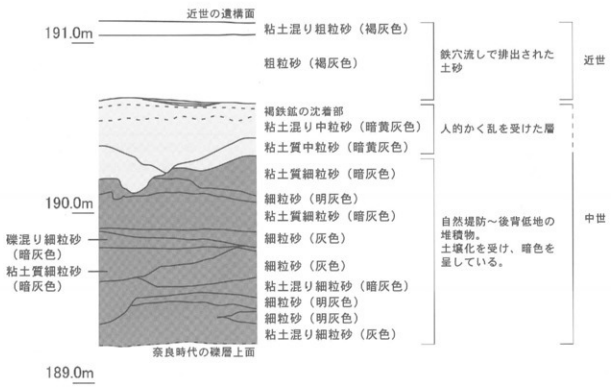
1，3　自然堤防～後背低地の堆積物。土壌化が進んでいる。
2　後背低地に広がった氾濫流による堆積物。
4　河岸に形成された砂州の堆積物。
5　河床礫～河岸の礫州の堆積物

第２図　縄文時代晩期遺構面下の層序

ら、鉄穴流しなどの人的開発の影響を受けた堆積物と考えられる（第３図）。風化した長石粒子が多いことは、風化花崗岩を切り崩して川に流した土砂が堆積したことを示しているとみられる。通常の堆積物では時間をかけて水流によって運搬されるうちに、弱い粒子は失われて石英などの硬質な粒子の比率が高くなる。

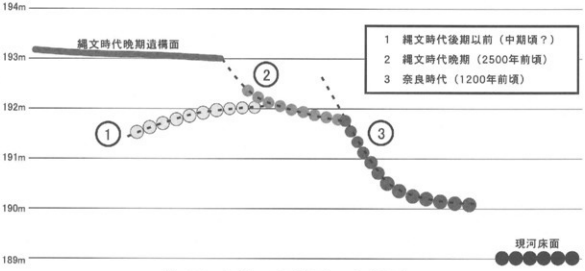
堆積層中に挟まれる火山灰層について　原田遺跡では、黒色土壌中にデイサイト質の火山灰層が認められた。火山灰層はかく乱によって途切れることもあるが、層厚は15cm程度で、調査区内の広い範囲に面的に追跡することが出来た。火山灰層はϕ２～１㎜程度の粒子を主体とし、灰色を帯びたデイサイト岩片からなり、数㎜からまれに数cmに達する白色軽石が少量含まれている。同質の火山灰層は、尾原ダム予定地内の家ノ脇Ⅱ遺跡、家の後Ⅰ・Ⅱ遺跡など他の調査区でも確認されている。この火山灰層は、構成鉱物と岩片の特徴から三瓶火山の噴出物に対比することができる。三瓶火山は、縄文時代中期と後期に比較的大きな活動を行っており、それぞれ4800年前前後、3700年前前後の放射性炭素年代が得られている。この２回の活動によって噴出された火山灰は、岩質に違いが認められず、また、噴出量も似通っている。そのため、鉱物組成などから両者を区別する決め手がない。原田遺跡では、縄文時代晩期の遺構面下にあり、火山灰層直下の黒色土壌から3740yr.BPの年代値が得られていることから、縄文時代後期の噴出物（三瓶太平山降下火山灰）に対比される。なお、三瓶火山噴出物と縄文遺跡の詳細な関係が最初に明らかになった頓原町の板屋Ⅲ遺跡などでは、フィールドネームとして縄文時代後期の噴出物を「第１ハイカ」、後期の噴出物を「第２ハイカ」と称している。

河道の変遷　河床堆積物の分布から河道の変遷をみると、縄文時代晩期から現河床まで第４図のように時代が新しくなるほど河床高度が低下していることがわかる。山間部を流れる河川は、下方へ



第３図　奈良時代の河道を埋積する堆積物

の浸食力が強く働くため、時間経過とともに河床が低下することを反映している。参考までに、縄文時代晩期と奈良時代の河床高度をそれぞれ 192 m、190 mとして、河床が低下する平均速度を概算すると、縄文時代晩期から奈良時代までが 15 ㎝／ 100 年間、奈良時代から現在までが 8 ㎝／ 100 年間になる。河床高度が低下することで、河川堆積物が供給される高度も低下するはずであるが、近世には比較的粗粒な堆積物が、古い時代よりも高い位置まで供給される傾向がある。この時期は、砂鉄採取と製鉄の影響で斐伊川への土砂供給量が著しく増大し、河川の状況が大きく変化した時期である。下流部では河道内の土砂堆積が著しく進んだことが知られている。尾原ダム予定地付近の当時の状況は今のところわからないが、堆積物の分布から洪水時に高い位置まで土砂が供給されるようになったと言うことができ、洪水規模の増大と堆積による河床の上昇の可能性が考えられる。斐伊川には「暴れ川」のイメージが強いが、それは特に近世以降の状況によるものと思われ、製鉄によって山地が荒廃する以前は状況が異なっていたと予想される。かつての斐伊川の姿を示す証拠として、縄文時代晩期の遺構面高度と、河床高度の関係が注目される。第 4 図で示した河床堆積物は河道の肩に近い位置であるとはいえ、比較的大きな礫からなる堆積物であることから河道の最深部と著しく差があるとは考えにくく、生活の場（遺構面）と河床の高度差が小さかったといえる。このことは、洪水規模がそれほど大きくなかったことを示していると推定され、遺構面付近の堆積物が細粒分を主体として土壌化がよく進んでいていることからも、氾濫の影響が少ないと言える。対岸の前田遺跡でも、高度的に低い位置にある弥生時代の遺物包含層とその上位に重なる堆積物が後背湿地の泥質堆積物からなり、洪水の影響が小さいことが推定できる。高位の段丘上の堆積物について前田遺跡 3 区調査区は、標高 260 m前後の平坦面にあり、ここでは層理面が南に傾斜した砂質の河川性堆積物が観察された（写真 1）。現河床との高度差は約 60 mの段丘面で、かなり古い時期のものと考えられる。仮に、縄文時代晩期から現在までと同じ速度（12 ㎝／ 100 年）で河床の低下があったとすると、60 m高い位置に河道があったのは 5 万年前ということになる。なお、少なくとも最終氷期最盛期（1.6 ～ 2 万年前）より古いことは確実と思われるが、気候と海面高度が大きく異なる氷期中の浸食営力は現在と大きく異なる可能性が高いので、5 万年前という数値はあ



第 4 図　時代毎の河床高度の変化模式図

くまで目安である。この堆積物は、堆積構造の特徴から蛇行の内側に形成された蛇行州の堆積物とみられる。層理面の傾斜方向から、この堆積物を形成した流路は、3区調査区の南側を回り込んで流れていたと考えられる。この砂質の堆積物には、厚さ約20㎝の軽石質の火山灰層が挟まれている。この火山灰については詳しい検討は行っていないが、起源は三瓶火山と推定され、対比される可能性が高いものとして、噴出時期が3～4万年の三瓶池田軽石、5～7万年前の三瓶雲南軽石、約10万年前の三瓶木次軽石がある。いずれも、仁多町付近で数10㎝の厚さで分布することが確認されている。

まとめ　原田遺跡の堆積物から、断片的ではあるが縄文時代後～晩期以降の斐伊川の河川状況の変遷を推定することができた。製鉄によって山地が荒廃する以前と以降では、河川状況はかなり異なっていたことが予想され、縄文～弥生時代には現在のイメージよりずっと穏やかな河川だったと考えられる。最近、斐伊川下流の出雲平野部では、出雲市の青木遺跡をはじめ弥生遺跡が相次いで発見されている。これらの遺跡の発見からは、弥生時代の斐伊川が「暴れ川」のイメージとは異なり、穏やかな状況が予想される。このことは、原田遺跡の状況と調和的である。今後、発掘調査による情報が蓄積されることで、斐伊川の変遷史がさらに具体的に解明されることが期待できる。

第２節　原田遺跡埋蔵文化財発掘調査に伴う土壌分析結果

島根大学生物資源科学部土壌圏生態工学研究室
若月　利之、三浦　聡子

１．目　　的

島根県埋蔵文化財調査センターより依頼された土壌標本（標本 No. １～ No.11）について、当該の土器が遺体埋設に使用されたかの有無を土壌の理化学分析により調べること。

２．方　　法

土色を観察しその後、一般理化学分析を行った。炭素（C）・窒素（N）はヤナコ CN コーダーで測定した。その他の無機元素は土壌を 0.1 規定塩酸溶液（土壌：溶液＝５ｇ：30ml）で２時間抽出を３反復後、100ml として、抽出液を島津製作所 ICP2000（高周波プラズマ発光分析装置）で分析した。

３．結果と考察

表に、分析結果と土色を示した。土色については、灰黄、灰黄褐、暗灰黄色（乾土）を示していた。各元素の濃度は、105℃乾燥土当たりで計算してある。埋設土器の内部および土器より流出したと推定される土壌では、対照区に比べ、カルシウム（Ca）、リン（P）濃度が非常に高くなっていた。斐伊中山古墳群―西支群―の調査の際に行った古墳の埋葬主体床面における屍体の位置同定では、屍体のあった場所と推定された土壌面では、可溶性リン濃度が著しく高くなっており、今回の分析結果は、埋設土器１～４が遺体埋葬に利用された可能性が高いことを示すものであると言える。埋設土器ごとに比較すると、カルシウム（Ca）濃度については、埋設土器１は埋設土器２・３・４より低くなっているが、これは年代の経過による周辺の土壌の混入や、溶脱等によるものであると推測された。また、カルシウム（Ca）、リン（P）と同様に銅（Cu）も土器内および周辺では、比較的高い濃度を示しており、土器内もしくは土器周辺に装飾品等が一緒に埋葬されていたことが推測された。

なお、本調査で用いた対照区では、斐伊中山古墳群―西支群―および下山遺跡集石土壙群、上野遺跡調査での対照区に比べ、リン（P）等の元素濃度が高くなっており、人骨等による影響を受けていないとは言い切れない。また、屍体が埋葬されていたと思われる埋設土器１～４が比較的狭い範囲内に出土しており、この場所は墓地として利用されていた可能性がある。

表1）標本土壌分析結果

No.	水分含量	TC	TN	C/N	Ca	Mg	K	Na	S	Mn	Mo	Zn	Cu	P
	(%)	(%)	(%)	ratio	(cmol(+)/kg)				(mg/kg)					
1	16.68	1.13	0.10	11.8	1.23	0.23	0.16	0.16	11.9	36.5	7.8	1.7	2.7	328.9
2	18.02	1.06	0.08	12.58	1.27	0.25	0.18	0.16	11.2	30.2	7.7	1.6	2.5	326.8
3	20.33	1.03	0.09	11.84	1.22	0.25	0.17	0.16	11.1	31.1	7.5	1.6	2.3	315.1
4	20.70	1.15	0.09	12.36	1.33	0.28	0.17	0.16	11.6	33.0	7.8	1.6	2.3	298.1
5	17.32	1.06	0.08	12.74	2.62	0.55	0.19	0.30	15.7	27.5	6.7	1.7	2.6	279.3
6	19.06	0.92	0.08	11.11	2.78	0.61	0.21	0.31	16.6	26.4	6.4	1.8	2.9	277.2
7	18.70	0.77	0.08	9.42	2.77	0.66	0.22	0.31	15.9	24.7	6.2	2.0	2.8	275.5
8	20.13	1.02	0.10	10.53	2.67	0.45	0.19	0.30	15.6	30.2	7.0	2.1	3.6	397.0
9	5.55	0.94	0.10	9.11	2.44	0.44	0.18	0.26	15.5	28.3	6.8	2.8	3.1	374.3
10	22.32	1.43	0.11	12.93	2.53	0.53	0.13	0.24	15.3	36.7	8.6	2.6	3.4	385.8
11	9.74	1.52	0.13	11.56	0.65	0.23	0.14	0.19	9.5	21.4	8.4	2.0	0.9	59.7

表2）標本土壌土色

No.	乾　土		湿　土	
1	10YR5/2	灰黄褐	10YR2/2	黒　褐
2	10YR5/2	灰黄褐	10YR2/2	黒　褐
3	10YR5/2	灰黄褐	10YR2/2	黒　褐
4	10YR5/2	灰黄褐	7.5YR2/1	黒
5	10YR5/2	灰黄褐	10YR2/2	黒　褐
6	2.5Y5/2	暗灰黄	10YR2/3	黒　褐
7	2.5Y5/2	暗灰黄	10YR2/2	黒　褐
8	10YR5/2	灰黄褐	10YR3/1	黒　褐
9	10YR6/2	灰　黄	10YR2/2	黒　褐
10	10YR5/2	灰黄褐	10YR3/1	黒　褐
11	10YR4/2	灰黄褐	7.5YR2/1	黒

表3）土壌サンプル

No.	試　料　名	
1	埋設土器 1-1	土器内　上部
2	埋設土器 1-2	土器内　中部
3	埋設土器 1-3	土器内　下部
4	埋設土器 1-4	土器内　最下部
5	埋設土器 2-1	土器内　上部
6	埋設土器 2-2	土器内　中部
7	埋設土器 2-3	土器内　下部
8	埋設土器 3-1	土器内
9	埋設土器 3-2	土器内土が土器外へ流出（？）
10	埋設土器 4-1	土器内
11	対照区	

第３節　家ノ脇Ⅱ遺跡における花粉分析および植物珪酸体分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

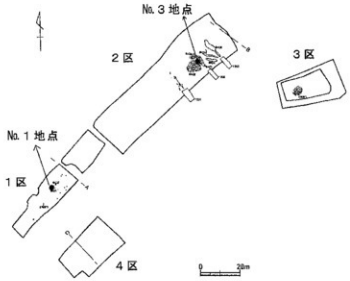
はじめに

家ノ脇Ⅱ遺跡は、島根県東南部、仁多郡仁多町大字佐白に位置する。同遺跡では、尾原ダム建設に伴う発掘調査の一環として発掘調査が行われた。

本報告は、島根県教育委員会が遺跡周辺での古植生等の古環境推定を行う目的で、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した、自然科学分析（花粉分析および植物珪酸体分析）結果の報告書を、まとめ直したものである。

試料について

分析試料は、図１に示す各地点で、島根県教育委員会と協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。各地点の模式柱状図および試料採取層準を図２、３の各種ダイアグラム左端に示す。



第１図　試料採取地点

分析方法

花粉分析処理は渡辺(1995)、植物珪酸帯分析処理は藤原(1976)のグラスビーズ法に従い実施した。全ての分析の観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が 200 個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を中村（1974）に基づき、イネを含むイネ科（40 ミクロン以上）と、栽培種を含む可能性の低いイネ科（40 ミクロン未満）に細分した。ただし、多くの試料で花粉化石の含有量が少なく、木本花粉を 200 個体検出することができなかった。植物珪酸体分析ではグラスビーズが 400 個体以上になるまで検鏡を行い、同時に検出される分類可能なものの同定を行った。分析結果

分析結果を図３の花粉ダイアグラム、表１の花粉化石組成表、図２の植物珪酸体ダイアグラム、表２の植物珪酸体化石組成表に示す。

図３の花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。また、花粉ダイアグラム右側に「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「胞子」を加えた総合ダイアグラムを示している。総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基数にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。

図２の植物珪酸体ダイアグラムでは、各分類群毎に検出数を１ｇあたりの含有数に換算し、スペクトルで示している。

No. 1 地点の古環境（植物珪酸体分析結果から）

(1)古墳時代後期以前に認められる土壌化作用について

堆積状況から、試料採取断面には、３回の土壌化作用が認められた。試料１、３、５がこれにあたり、土壌化作用の顕著でない試料２に比べ植物珪酸体の検出量が多かった。

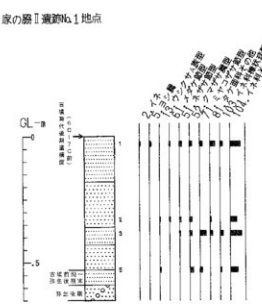
洪水による砂層の堆積後、上面からの土壌化作用があり、炭、腐植などが集積していったと考えられる。さらに次の洪水により先の（古）土壌がパックされ保存された。また、土壌化の過程での生物擾乱や堆積時の攪乱により、土壌化が顕著ではない部分にも、一定量以上の植物珪酸体が付加されたものと考えられる。

(2)古墳時代後期以前の古植生

植物珪酸体の出現傾向から、試料５～２ではササ類が卓越し、遺跡近辺にはササ原が広がっていた可能性がある。

(3)古墳時代後期以降

試料１では、下位で検出された分類群からウシクサ族型が抜け、イネ、ヨシ属が検出された。一方、２区３地点での上部の数試料からは、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で出現する。このことは、試料１からイネが検出されたことと、調和的である。遺跡内で、規模は不明であるが、稲作が行われた可能性が指定できる。



第２図 No. 1 地点の植物珪酸体ダイアグラム

遺跡内には斐伊川沿いの湿地環境が広がり、稲作も行われていたと考えられる。

No. 3 地点での古墳時代後期の古環境（花粉分析結果から）

同一層準を、およそ２cmの厚さに細分して分析試料とした。得られた結果（図３）には、上位でスギ属が減少し、マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属が増加するなどの傾向性が認められた。

従来、島根県東部山間地域では花粉分析が行われたことが無く、古墳時代以前の古植生が判らないものの、今回最下部で得られたスギ属卓越の古植生（近辺でのスギ林の分布）は、島根県東

部平野部での花粉分析結果（例えば、大西、1993）から、当時の植生として充分考え得るものである。

一方、マツ属（複維管束亜属）、コナラ属の急激な増加は、マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属は生長が早く、伐採地などに二次林として生育する種であると共に、薪炭林の主要素でありことなど、古墳時代にすでに始まったとされる、タタラ製鉄の関連から注目される。

しかし、開発行為による森林の荒廃により二次林化は容易に起こり、タタラにのみ直接の原因を求めることには難がある。当然のことであるが、この原因には人間活動に伴う、例えば焼き畑や、窯業などさまざまな原因が考えられる。

まとめ

家ノ脇Ⅱ遺跡での花粉、植物珪酸体分析の結果を踏まえ、遺跡近辺の古環境を考察した。特筆すべき点は以下の事柄である。

①植物珪酸体分析から、古墳時代後期以降に、No. 1地点近辺で稲作が行われた可能性が指摘できた。このことは、花粉分析結果と調和的であった。

②花粉分析から、古墳時代後期の間に遺跡近辺のスギ林がアカマツやコナラを要素とする二次林に代わったことが推定された。タタラや焼き畑などの様々な人間活動がその原因として考えられる。

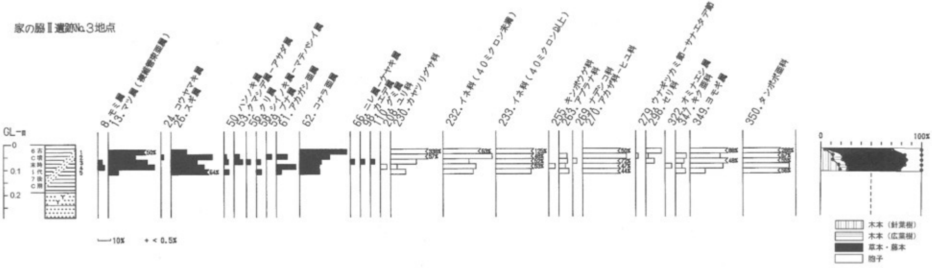
引用文献

大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化．地質学論集，39，33-39.

中村　純（1974）イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究，13,187-197.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15-29.

渡辺正巳（1995）花粉分析法．考古資料分析法，84 - 85. ニュー・サイエンス社.



第3図　No. 3地点の花粉ダイアグラム

表1　No. 3地点の花粉組成表

試料番号		1	2	3	4	5
8 Abies	モミ属			1	1	
				3%	5%	
13 Pinus (Diploxylon)	マツ属：複維管束亜属	4	10	9	7	2
		50%	22%	31%	37%	8%
24 Sciadopitys	コウヤマキ属		1			
			2%			
26 Cryptomeria	スギ属	1	15	6	5	16
		13%	33%	21%	26%	64%
50 Alnus	ハンノキ属		1	1		1
			2%	3%		4%
53 Carpinus-Ostrya	クマシデ属－アサダ属		2	2		
			4%	7%		
56 Castanea	クリ属			1		
				3%		
58 Castanopsis-Pasania	シイノキ属－マテバシイ属			1		1
				3%		4%
59 Fagus	ブナ属		2			
			4%			
61 Cyclobalanopsis	アカガシ亜属		4		3	1
			9%		16%	4%
62 Quercus	コナラ亜属	3	11	5	3	4
		38%	24%	17%	16%	16%
66 Ulmus-Zelkova	ニレ属－ケヤキ属			1		
				3%		
98 Acer	カエデ属			1		
				3%		
110 Elaeagnus	グミ属			1		
				3%		
208 Liliaceae	ユリ科				1	
					5%	
230 Cyperaceae	カヤツリグサ科	27	26	6	1	3
		338%	57%	21%	5%	12%
232 Gramineae (<40)	イネ科：40ミクロン未満	5	18	6	5	6
		63%	39%	21%	26%	24%
233 Gramineae (>40)	イネ科：40ミクロン以上	10	22	15	10	7
		125%	48%	52%	53%	28%
255 Ranunculaceae	キンポウゲ科				1	
					5%	
263 Cruciferae	アブラナ科		3	2	1	2
			7%	7%	5%	8%
269 Caryophyllaceae	ナデシコ科			1		
				3%		
270 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	4	16	21	9	11
		50%	35%	72%	47%	44%
279 Echinocaulon-Persicaria	ウナギツカミ節－サナエタデ節		1			
			2%			
298 Umbelliferae	セリ科	1	1	2		
		13%	2%	7%		
322 Patrinia	オミナエシ属				1	
					5%	
347 Carduoidae	キク亜科		4	2	1	2
			9%	7%	5%	8%
349 Artemisia	ヨモギ属	7	11	14	5	3
		88%	24%	48%	26%	12%
350 Cichorioideae	タンポポ亜科	23	31	16	7	14
		288%	67%	55%	37%	56%
402 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条孔胞子	18	18	16	8	14
		225%	39%	55%	42%	56%
403 TRILATE-TYPE-SPORE	三条孔胞子	16	17	4	4	6
		200%	37%	14%	21%	24%
木本花粉総数		8	46	29	19	25
		7%	21%	22%	26%	27%
草本花粉総数		77	133	83	42	48
		65%	62%	63%	58%	52%
胞子総数		34	35	20	12	20
		29%	16%	15%	16%	22%

表2　No. 1地点の植物珪酸体組成表

試料番号	1	2	3	5
2　イネ	1 7 0.2			
5　ヨシ属	2 14 0.86			
13　ウシクサ族A節		1 6		2 11
51　ネザサ節型	3 21 0.1	2 12 0.06	1 6 0.03	
52　クマザサ属型	3 21 0.15	3 18 0.13	3 18 0.14	5 28 0.21
61　メダケ節型	1 7 0.08	1 6 0.07		
71　ミヤコザサ節型	3 21 0.06		8 48 0.15	3 17 0.05
83　タケ葉枠その他	6 41	1 6	3 18	
103　イネ科棒状珪酸体	3 21		4 24	2 11
104　イネ科その他	12 82	9 53	15 91	11 61
植物珪酸体総数	34	17	34	23
カウントガラスビーズ数	439	509	498	541
カウント総数	473	526	532	564
試料重量	7.060	7.024	6.997	7.014
ガラスビーズ重量	193	192	192	192

上段　検出個数
中段　検出密度（単位；×100個／g）
下段　推定生産量（単位；kg／m^2・cm）

第４節　原田遺跡における自然科学分析

渡辺　正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

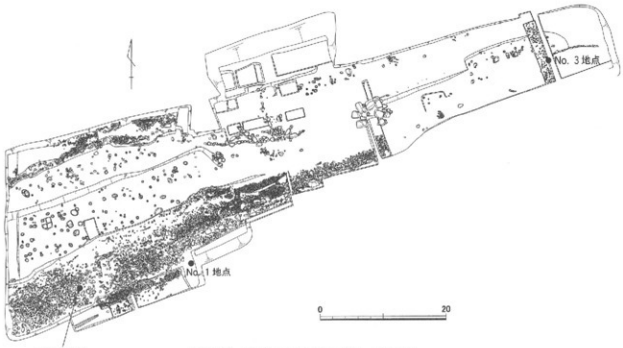
原田遺跡は、島根県東部山間地の仁多郡仁多町に分布する。

本報は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが遺跡周辺の植生変遷の推定、堆積時期の推定などを行うために、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した調査報告書の概報である。

また、本報では花粉分析、植物珪酸体分析について述べている。

分析試料について

図１の調査区内の平面図に、試料採取地点を示す。各調査区の模式柱状図および分析試料採取層準を、各分析結果を示したダイアグラム左端の柱状図右側に示す。



第１図　試料採取地点（１／300）

分析方法

花粉分析処理は渡辺(1995)に、植物珪酸体分析処理は藤原(1976)のグラスビーズ法に従い行った。

分析結果

各分析結果を図２～７の各ダイアグラムに示す。

図２～４の花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基数にし、各々の木本花粉、草本花粉について百分率で表した。また検出数の少ない試料では、出現した種類を「＊」で示した。さらに花粉ダ

イアグラム右側に、「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「胞子」を加えた総合ダイアグラムを示している。総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基数にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。また花粉粒の同定にあたり、イネ科を中村（1974）に従い、イネを含む可能性の高いイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性の低いイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

図5～7の植物珪酸体ダイアグラムでは、1gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群毎に示した。

花粉分帯

分析の結果すべての試料から花粉化石が検出されたものの、含有量が少ないためにほとんどの試料で統計処理に十分な量の花粉化石が検出できなかった。また、統計処理を行った試料では顕著な花粉組成の変化が認められなかったことから、今回の解析では花粉分帯（地域花粉帯の設定）を行わなかった。

花粉化石の含有量の少ない原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のような事が考えられている。

1．堆積速度が早いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
2．花粉化石の平均的な粒径（数～100 μ）と堆積物の粒度が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
3．土壌生成作用にともなう堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
4．花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5．有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物が多く、処理の過程で花粉化石が濃縮できなかった。

分析試料全般に、やや暗～黒色の色調を帯びており、有機物の含有が見込まれた。このことは、分析残渣炭片が比較的多く含まれていたことと整合する。一方で植物片の含有量は多くなかった。

詳細に検討すると、№1地点の各資料は植物珪酸体の検出量も少ないことから、堆積速度が早いために、堆積物中に花粉化石が濃縮されなかったと考えられる（上記1）。

一方№2地点（特に下位の4試料）、および№3地点の各資料では、植物珪酸体の検出量は多かったが、花粉化石に紫外線によると考えられる劣化が顕著に認められた。また花粉化石の検出量は僅かであったが、草本花粉化石、胞子化石の検出量は木本花粉に対し多かった。このような傾向は一般に草原土壌で認められ、土壌生成作用に伴い花粉化石が消滅したものと考えられる（上記3）。

また堆積物粒子がやや粗いことも、本質的に花粉の含有量が少なかった一因である（上記2）と考えられる。

古植生推定

島根県東部山間地域での微化石分析は、尾原ダム建設関連の発掘調査に伴い実施されるようになった（渡辺，2003など）。このため、比較可能な資料が無いに等しい状況である。本項では、各堆積時期毎に花粉・植物珪酸体分析の結果から遺跡近辺の古植生について考察を加える。

表1　^{14}C年代測定値

No.	整理番号	測定年代 (yBP)	σ^{13}C (‰)	補正^{14}C (yBP)	暦年代*1 (cal y.)	測定番号 (IAAA-)
3－1	SH-1	3,710±40	-26.42	3,700±40	BC2200 ～ 1950	11613

(1)3700年前頃

3地点試料1層準で表1に示すような^{14}C年代測定値が得られている（試料3－1）。このことから、3地点試料1層準が三瓶東麓に分布する第2黒色土に、上位の層中に狭在される火山灰が三瓶束麓に分布する第1ハイカに相当することが推定される。これらのことは、出土遺物からの推定と矛盾しなかった。

花粉分析では、土壌化のために花粉化石のほとんどが劣化・消滅している中で、イネ科、キク科の草本花粉、シダ類胞子が認められている。また植物珪酸体分析では、ヨシ属、ススキ属型、ササ類が検出されている。

以上のことから、林床から林縁にかけてはササ類が生育し、河原にかけての斜面にはススキなどのイネ科草本や、キク科の草本が茂り、河原にはヨシが繁茂していたと考えられる。

(2)奈良時代

①周辺地域の森林植生

2地点での木本花粉の検出量は草本花粉、胞子に比べはるかに少なく、しかも生産量が多く散布域の狭い「ハンノキ属」が主であったことから、木本花粉組成が広範な地域の植生を表してはいないと考えられる。一方2地点試料4では、少ないながらも花粉の散布域の広い種類が多く検出されていることから、斐伊川上流地域の古植生を表している可能性がある。

ここでは、マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属などの、いわゆる二次林要素が卓越し、人間による開発行為がかなり進んでいたことが示唆される。

②遺跡近辺の植生

花粉、植物珪酸体ともに「イネ科（40ミクロン以上）」、「イネ」が検出され近辺での稲作が示唆される。また、1地点では「ソバ属」の花粉が、2地点では「キビ族型」の植物珪酸体が検出されることからこれらの雑穀が栽培されていた可能性もある。しかし、調査地点に水田耕作が可能な平地がなく、稲作は斐伊川対岸、あるいは上流で行われていたと考えられる。

花粉分析では、土壌化のために花粉化石のほとんどが劣化・消滅している中で、イネ科、キク科の草本花粉、シダ類胞子が認められている。また植物珪酸体分析では、ヨシ属、ススキ属型、ササ類が検出されている。また前述のように、2地点では少ない花粉含有量にもかかわらずハンノキ属花粉の割合が高く、近辺にハンノキ類が生育していた可能性が示唆される。

以上のことから、林床から林縁にかけてはササ類が生育し、河原にかけての斜面にはススキなどのイネ科草本や、キク科の草本が茂り、河原にはヨシが繁茂する湿原があり、ハンノキ類の樹木が生育していたと考えられる。

(3)江戸時代以降

①周辺地域の森林植生

同時期の斐伊川下流域の出雲平野および宍道湖周辺域ではマツ属（複維管束亜属）が卓越するが、ここではコナラ亜属が卓越する傾向にある。コナラ亜属もマツ属（複維管束亜属）とともに二次林要素であり、人間による開発行為がかなり進んでいたことが示唆される。一方で、薪炭林としての継続的な森林利用も推定される。

②遺跡近辺の植生

花粉、植物珪酸体ともに「イネ科（40ミクロン以上）」、「イネ」が検出され近辺での稲作が示唆される。また「ソバ属」の花粉が検出されることから、ソバが栽培されていた可能性もある。

花粉分析では、土壌化のために化粉化石の劣化・消滅が進んでいるが、イネ科、キク科をはじめとする草本花粉、シダ類胞子が認められている。一方、植物珪酸体の検出量は少ない。草本花粉には畑作雑草の可能性があり、調査値近辺に畑が存在した可能性もある。

まとめ

原田遺跡での花粉・植物珪酸体分析の結果を踏まえ、遺跡近辺の古環境を考察した。特筆すべき点は以下の事柄である。

①花粉および植物珪酸体分析から、奈良時代以降に、遺跡近辺で稲作をはじめ、雑穀栽培が行われた可能性が指摘できた。

②奈良時代および江戸時代の斐伊川上流域での標準的な花粉組成が得られた。今後さらにデータの蓄積を重ねることにより、植生変遷などの古環境変遷を明らかにすることが可能となる。

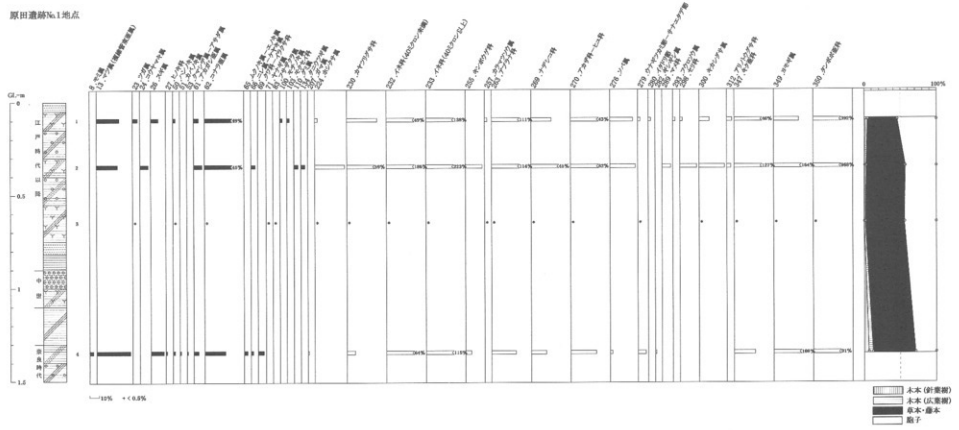
引用文献

中村　純（1974）イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究，13，187-197.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15-29.

渡辺正巳（1995）花粉分析法．考古資料分析法，84－85．ニュー・サイエンス社.

渡辺正巳（2003）家の後Ⅰ遺跡発掘調査に係る花粉、植物珪酸体分析．家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡－尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２－，31-36，国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会.



第2図　No. 1地点の花粉ダイアグラム